

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年七月廿日印刷納本 昭和十三年八月一日發行

第四卷 第八號

淨土

八月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

東芝 京公 市芝 區地 淨土宗務所

振一 替五 口一 座一 東一 京番

東京帝大教授
文學博士

宇井伯壽監修

(最新刊)

實物全國
書店にあり

コンサイス佛教辭典

學界の一大明星！
語彙豊富、体裁
斬新、携帶至便、
而も至廉な辭典
の出現、從來數
十圓もした大辭
典以上の語彙を
もつ、此の辭典が
僅か四圓五十錢
で求められる。

- ◇語彙：二萬五千四百餘。佛
教辭典中の最高數を示す。
- ◇内容：簡結明快、専門家用
通信俗用何れにも役立ち、
然も絶対に信頼し得る。
- ◇配列：語の配列は便利な音
引で、恰も電話帖を索く様
に簡單にひける。
- ◇体裁：革装コンサイス、堅
五寸五分、横三寸、横組最
新型美本。

監修者宇井博士は序に「決して名目のみの監修者ではない」と
自ら責任を明にされてゐる。此のハチ切れる様な内容とスマー
トな體裁とは、教界は勿論あらゆる方面の大驚異となる。

特價四圓五十錢

(送料十四錢) 特價期限八月末限り期限後
は絶対に定價に復す(定價五圓五錢)

大正大學教授 高瀬承嚴編 (最新刊)

佛教國文讀本

古來より現代に至る
あらゆる國文中より
佛教關係の名篇を拔
粹したるもの。
斯様な讀本は今迄に無いだ
けに中學校女學校其他専門
學校等各方面より副讀本用
として申込も相當の數に達
し個人の讀物としても非常
に興味を以て求められてゐる

申込忽ち殺到！(第一二八頁)
(定價一圓四角錢送料十四錢)

常盤博士序 平井巽著 定價二圓五十錢
送料十四錢
指導原理としての佛教學

文學博士 宇野圓空著 定價一圓二十錢
送料十錢
佛教が要求する宗教生活

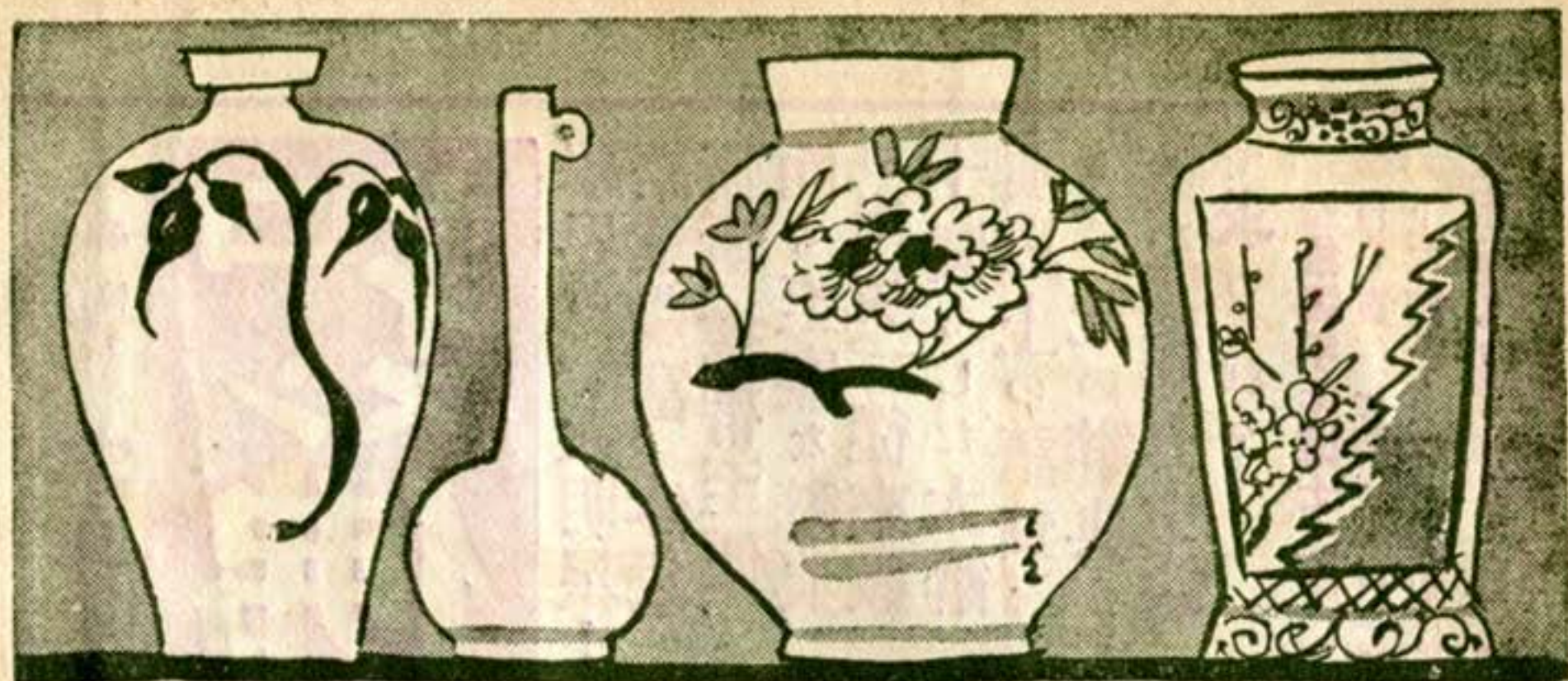
加藤咄堂著 定價一圓二十錢
送料十二錢
佛教とは何ぞや

大正大學教授清水谷恭順著 定價一圓二十錢
送料十二錢
觀音經講話

發行所

大東出版社

東京市芝公園地七ノ十
振替東京一九四七一番



◇ 淨

土

第四卷
第八號

八月號

目次◇

表 扉

紙 繪

井上正春
鈴木金平

彌々聖業の達成へ

陸軍大將 岸本綾夫

むらさきへの憧憬

中村辨康

武道を語った女性

山田靈林

喇嘛教徒と日本

小林義道

房州に於ける行誡上人

和田正系

われ生きてあれば

吉田絃二郎

支那時文釋義

西澤道寛

信仰相談

中村辨康

(六)

(五)

(四)

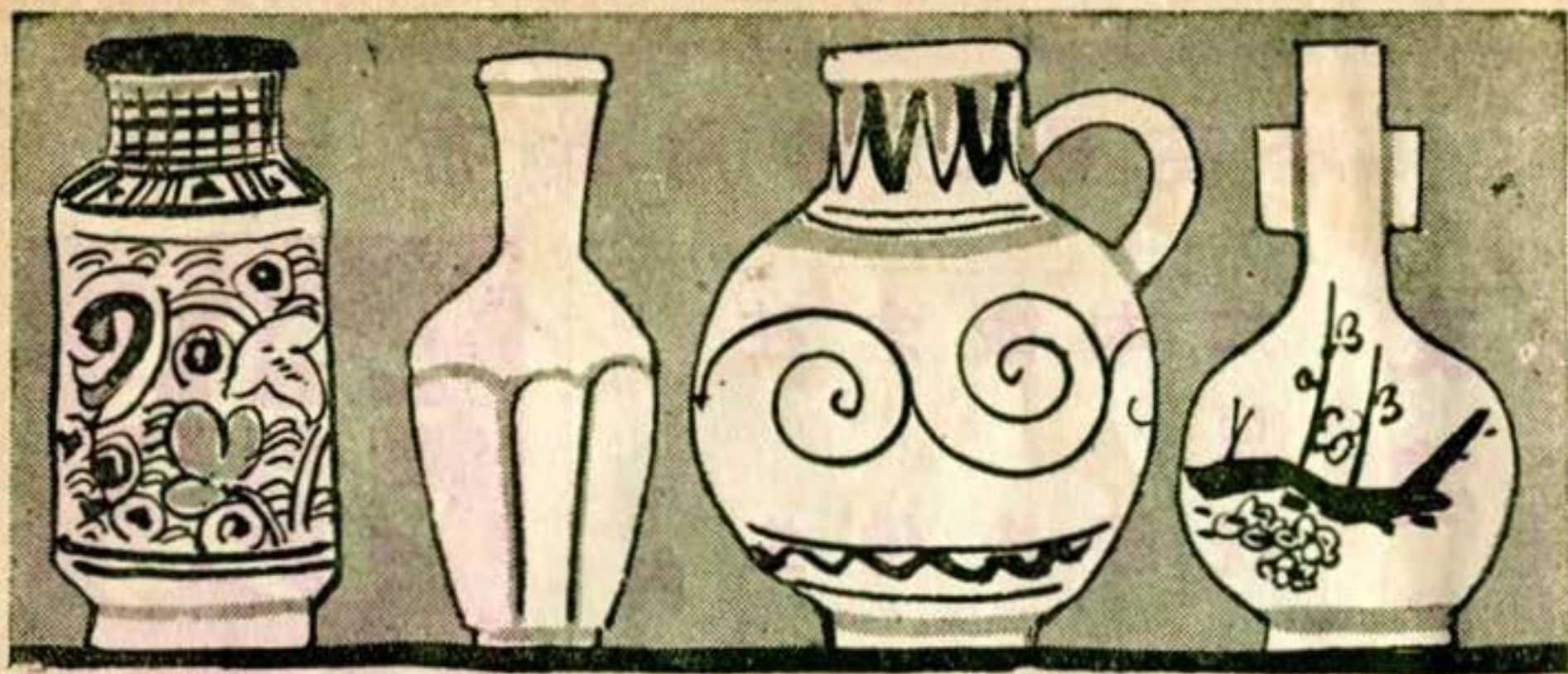
(三)

(二)

(一)

(一)

(一)



薩摩路の純情詩人……………小橋麟瑞(一六)

婦人の夏の美容……………橋本樂榮(一五)

現より地戰友の死……………中野隆雄(一五)

隨筆寒山頂上月輪孤なり……………吉水靈家(一四)

漫畫・パチンコ……………(一五)時世は移る……………(一六)

歌壇……………與謝野晶子選(一三)

俳壇……………太田耳動子選(一七)

童話ひとつたゝら……………奥榮一(一五)

短篇義俠奴……………小島健三(一四)

長篇血しぶきの法將……………飯田光明(一六)

鑽仰運動ニュース……………(一五)

編輯後記……………(一五)

◇淨土 第四卷 第八號 八月號 目次◇

我が
信仰

往念懺本知
生佛悔願恩
院
郁芳隨圓
武者小路實篤
吉田絃二郎
佐藤春夫
岡本かの子

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！

この内容、この定価！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

會仰鑽人上然法・所行發

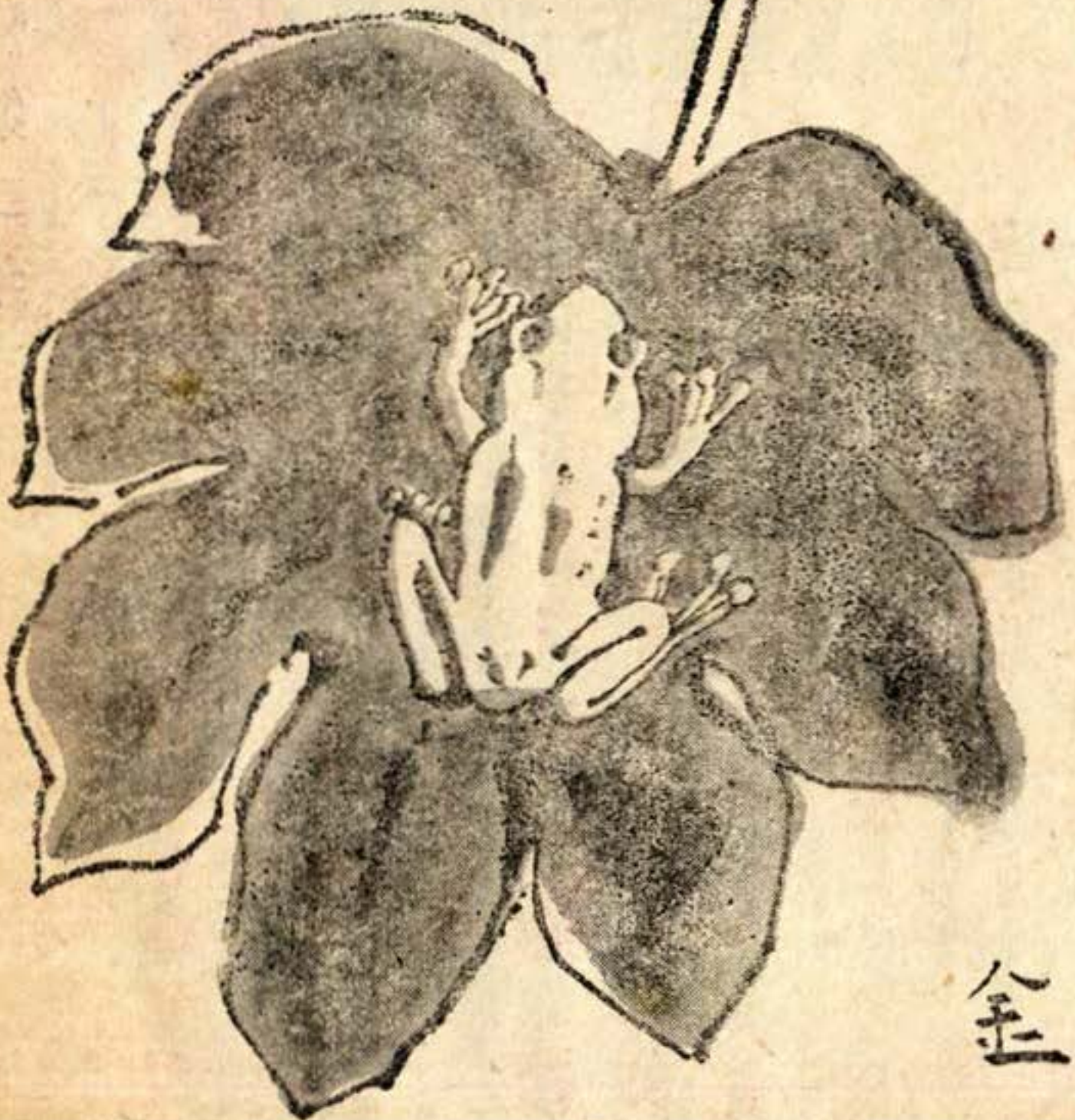
振替東京芝公園二一八七
東京芝公園二一八七

孝養のために精舎建立のいとなみを
なすことなかれ、心ざしあらばをの
をの群集せず、念佛して恩を報ずべ
し、もし群集あれば聞諍の因縁なり

法然上人法語二五九

浄土

八月號



金



彌々聖業の達成へ

— 事變第二二年を迎へて —

陸軍大將 岸 本 綾 夫

蘆溝橋に端を發した支那事變もいよく第二二年に入りまし
た。七月七日、その一周年を迎ふるに方り、忝くも優渥なる
御勅語を賜りましたことは、民草我等のこよなき感激でありま
すと共に、上下戮力一體となつて聖旨に對へまつらねばなり
ませぬ。

この一年月の間に皇軍の收めた戦果は、寔に戦史に類無き
赫たるものがあり、世界は今更にその無敵さに瞠目致して居
る。これは申す迄もなく、大御秘威のもと、皇道宣揚のために
力戦奮闘する皇軍なればこそで、我等は深く深く忠勇無比の我
が將兵の、陸に海に、炎熱酷暑を凌いで、の勞苦を感謝すると共
に、遠く異境に懸れられた護國の英靈に對して、心から痛惜哀
悼の念を捧げねばなりません。

それと共に、我々は、ます／＼今次事變の重大性を認識し、

神人共に對して恥ぢぬだけの、君國の一員たる自覺の下に、聖
戰の意義を、諸共に生き貫かねばなりません。勞苦は常に戦場
にあるものだけであつてはなりません。戦場にあるも、あらざ
るも、相共に聖戰に參與するものたらねば、何の大君の子たる
同胞の面目が立ち得ませう。まことに 明治大帝の御製の如く
「國をおもふところに二つはなかりけり戰のにはに立つも立た
ぬも」で、このことなくして眞に大業は成就致しませぬ。天業
賛の誠も現れませぬ。我等は等しく御勅語に見ゆる大御心に感
泣し、至誠を捧げて協力一致速かに聖果を達成して一日も早く
宸機を安んじ参らせねばなりません。政府が今次聖戰の究極目
的を達成する上に缺くべからざる政策として百般に亘つての舉
國一致體制の整備を強調するのも此心に外なりません。全體
人間の心程するいいものはない。我身にふりかゝる迄は、何事も

つい對岸事視致し易い。時局が極めて重大なるにも係らず、人はともすれば、事は支那での出来る位に感じ易い。今次の産業經濟統制策の發現に依て漸く我家の臺所に影響を感じる程度では、大陸に血涙を絞り熱汗を拭うて血塗ろ汗塗ろの苦闘を續ける我が將兵に對して甚だ相すまぬ次第です。假令身は戰場になくとも心は常に彼の地に闘ふ者と相等しく事艱に殉ずる氣持がなければなりません。

日本は實に嘗て無き難局に際してゐるのです。曠世の大事に臨んでゐるのです。皇國の興廢も東洋平和の存否も此の一事に係つて居ます。如何なる困苦に堪へても、やり抜かざるを得ぬ事態に我等は立至つて居る。大體眼中自己の野望のみあつて國民の安寧なく政權保全の爲には如何なる暴舉をするも敢て悔いぬ蔣政權の如きが存續する筈はない。天人ともに何で許さう。然るに相當頭張れるのは、事變が單純な背景のものでないことを示してゐる。事態は決して單純ではない、我等はどこまでも此の際東亞永遠の平和樹立の爲め粉骨碎身徹底的解決まで頑張らねばならぬ。少しでも途中で心を弱め氣を抜くことがあつては、悔を千載に残すも甲斐はない。光輝ある日本の歴史を今にして汚すことは出来ぬ。汚すも高むるも我等が手中にあるのだ。我等が祖先に、我等が子孫に對して、莞爾たり得るも得ぬのも、すべて我等が志次第なのだ。どこまでもやり遂げざる

を得ぬではないか。しかもこの大業を成就するまでには、今後ますます生活の困窮、勞苦の分擔が増すことであらう。然し、それも自國の心なき政權軍閥の爲に、家を失ひ子を失ひ土地を失ひつつある支那民衆の窮乏に比すれば、雲泥の差がある。彼の悲慘に對し、是は聖なる困苦です。我等の世代の擔ふべき聖なる義務です。君國に對する赤心の困苦です。寧ろ莞爾として此の勞苦を受取つて頂き度いものである。事變の眞因、底流、夾雜性を直視するならば、日支今回の衝突はまことに避くべからざるものなることが諒承出来るからである。此の困苦は相當永びくでせう。然し、その忍苦が無ければ、來るべき孫子の世代の苦が幾層倍かすると思へば、何としても忍ばざるを得ない。忍辱は慈悲の相ではありませぬか。ましてそれに依て、そこに聖の眞義、皇道の精華と東亞の安定とが齎せられるとせば一汁の簡素、一飯の節約も、聖なる菩薩行として輝くわけです。斯る鍛鍊を経てこそ始めて日本入は更に高い精神の段階に踏み入ることが出来るであります。此の試鍊をば是非共嘗へて下さい。

私が歐洲へ参つたのは、大戦後であります。大戦中は諸般の調査事務にたづさはつて居りました。大戦中四ヶ年の歐洲人の戦時生活は御承知の如く甚しい窮乏を凌いだもので、私の参りました頃も極度に切詰められたものでした。獨逸などはその

困苦が尙ほ今日迄も續いてゐるのですから、我々が忍ぶ位は寧ろ當然と云つていゝと思ひます。

近代戦の特徴は、何といつても、それが国力戦であることにある。武器のみの戦ではない。硝煙けふる戦場のみの戦ではない。經濟戦も必要なれば外交戦も亦必要、思想戦も亦た尤も必要である。所謂總力戦であることを悟らねばならぬ。我が家の臺所、我が一日の生活も、凡て戦場なのである。産業に従事する者も家計を預る者も凡て此の戦ひに馳せ参じなければならぬ。一本の燐寸も一片の麵麴も火器砲彈と變りはない。近代戦が經濟戦であることは、戦争遂行に所要の軍需資材の整備すけでも莫大な資力を要し之を之迄の軍事豫算でさへ日露役の五倍にもならうといふので分る。政府が産業經濟の全般に亘つて國家總動員の體制を強化し更に生活の逼迫化にも係らず貯蓄報國を鼓吹するのも、一に國內的國際的に經濟力を擴充維持することが戦ひに勝つ所以なればに外ならぬ。事務局に於ける自覺ある日本人として我々は此の國策に生きませう。眞の愛國眞の忠勇は、必ずしも銃とるのみではない。確固たる銃後の態勢ほど眞に戦争を援くるものはない。

それと共に、國民精神總動員の眞義を確固と把握して下さい。獨逸が負けたのは思想戦に負けたからです。長期戦の中には謠言も飛び策動も行はれ困苦も到來しようが、どこまでも高

き信念と精神的結合の下に團結して邁進し勝つて／＼勝ち抜かねばならない。聖戰の意義を確固と把握し、それが眞に國の危急を救ひ東亞の平和と正義とを確立するものなるを確信し此の信念の下に毅然たる態度で斷行し、以て第三國の策動野心を封じて、東亞の天地に正義人道を確立せねばなりません。その時淨邦嚴然として現成し聖果は達成せられるでせう。之は我等に課された貴い歴史的使命です。されば、今日の忍苦、今日の力闘こそ、此の聖果達成への念々の念佛行でなくてはなりません。念佛が淨土への參進の道としたならば、砲煙けふる異域での將兵の力闘に我が國土我が家庭での國民の忍苦こそは、まことに淨邦建立へ邁進する姿でなくてはなりません。淨土の教義のことはよく存じませぬが、行住坐臥の生活がそのまゝに菩薩行であり念佛行であるとしたならば、銃劔を帶ぶるも帶びぬも、田を耕すも事業に従ふも、老若男女の差別なく、國を擧げて、此の聖なる戦線に馳せ参じ、日夜に奮戦することこそ、最も貴き佛の教へ子、淨土の信者の姿でなくてはなりません。日本は戦争の最中です、戦場は海の彼方許りではありません。身邊日常の舉措も身は戦場に臨めりとの緊迫した觀念を持つて此の國難を乗越えて生き抜いて戴きたい。彌々聖果の達成へと突進んで戴きたい。(文責在記者)

(岸本大將は前陸軍技術本部長である)

法 語 解 說

むらさきの憧

法 然 上 人 詠 歌

中 村 辨 康

柴の戸にあけくれかゝる白雲を

いつむらさきの色に見なさむ

(玉葉集)

動物性の淨化

私達人間性の中に巢喰うて居る動物性位しふといものは
ありません。

反省しても反省してもあとからあとから鎌首を持ち上げて
來ます。

懺悔しても懺悔しても執念ぶかく隙をねらつては涙で清め

た心を曇らせて居ります。

實になさけないです。

私達の性根は個人主義で物欲が深く餘りにも劣情が起こ
り易いです。

それで居て存外自惚れ丈は強いです。

尤も此自惚れがあればこそ生きても居られるのでせうが、
然し考へて見れば全くなつて居ないのが私達の心です。

だからこそ信仰に依て、さうした醜い心から脱れようとす
るのでせう。

然るに信仰も中々ハッキリして來ないです。有るやうでも
あり無いやうでもあり、深く反省して見ると「有ると思つて

居る」程度ぐらゐなものかも知れないのです。

平穩な時には有るらしく思はれても、何か異常の事件にぶつつかると、何處かへ飛んで行つてしまつて信仰のしの字も見ないと云ふ有様です。

然し之は信仰がないからではありません。

信仰と云ふものを思ひ過して居るからです。一度信仰を得たらもう完全なものになると思ひすごして居るからです。

さうではありません。

信仰が初めから完全な姿になり得ると云ふことはあり得ないのは、私達の心の中に奥深く巢喰つて居る動物性が根強くて、容易に屈服されないからなので、その醜い心が勝を制した時、一時信仰の清い心が影をひそめたのに過ぎないと思ひます。

信仰は生長するものです。

「聖胎長養」と云ふ言葉もありますやうに、信仰心も段々養はれて行き生長して行きます。

菩薩の階位と云はれるものにも「十發趣」の次ぎに「十長養」と云ふのがあり、「信」の中へさへ「十信」と云ふ十通りの進歩があると云はれて居る位です。

つまりは生活の中心が定まり目的が決定しますれば、其志

に随つて色々見たり聞いたりするものが、心の資糧となり榮養となつて段々生長し、個人生活も社會生活も清められて行くものだと云ふことを物語つて居るものでありますが、念物の信仰にしましても、人間の精神發現と云ふものは、大概同じ経過を辿るものですから人に依て格別に相違する譯もなく段々進められ高められて行くものだからではないでせうか。

だから何うしても信念の向上を圖らなくてはなりませんのに、多くは「信念」と云ふものは固定するものだとか考へ、信仰を得た限り、それは一定不變であり完全であると誤解する爲に、生長が出来ないのではないかと思ひます。

若し「生長」とか「進歩」とか云ふ言葉が自力的でいけな

いなら「育て、頂く」と云つてもよいです。

いづれにせよ、如來様のみひかりに照らされつゝ化育され

て行かねばなりません。

無論信仰が變化して行くと云ふ意味ではありません。如來様への歸趣心に於ては何等更るところはありません。唯だよりよく人となつて行くのです。赤ん坊から段々成育されて行くのです。

つまり動物性が段々淨化されて行くのです。

生活の禍ひする「煩惱」

然し此動物性は人間の本能とも云ふべきもので、人間が生き物である以上、取り切れるものではありません。幾分づゝか如来様のみひかりに照らされて矯められて行くより外に方法はありません。

私達の心屋には「白雲があげくれかゝる」のです。

法然上人でさへ、さうなげいて居られるのですもの、まして私達の柴の戸には一年中白雲が立てこんで居るのです。

イヤ白雲どころでなく黒雲が渦巻いて居るのです。

自分では大分割引して居ますから白雲ぐらゐにしか思ひませんけれども、實は眞黒なむら雲なのです。

考へて見ますと佛教で云ふ「煩惱」の中の「思惑」と云ふ

のは此動物性なのです。「思」など云ふ變な字を使つて居るから一寸意味が分らなくなるのですけれども、つまりは色々の事物に起る思ひの心で古來から「思」を「造作の義」即ち私達の行爲の原動力たるものとして居りますが、それが「惑」と云ふ迷ひの状態に於てなされるのでいけない譯です。何れよい心ではありません。

即ち「貪」と云ふ「物を欲しがる心」と「瞋」と云ふ「直

に癪にさはる心」と「痴」と云つて「少しつまづく」と悲觀したがる心」と「慢」と云つて「自惚れる心」との四つを云つたものです。然し元來之は人間が生きて行くのには是非必要なもので、私達人間は之のあるゆゑにこそ生きて行けるのである、また進歩もあるのですから、強ちにすつかり跡方もなく無くしてしまへとはかりは云へないものではありません。

たとへば「貪」の原始的なものは「生きたい」氣持から始まります。生きたいからこそ食べたいとか飲みたいとか着たいとか思ふ譯です。

「瞋」と云ふのも他の強力なものに「殺されまい」「喰はれまい」とする防禦の爲のものでありますし「慢」は自分の中にいくらかの優つて居る點を見出して「心を安んじたい」氣持であります。

之に反して「痴」は自分を見極めようとも思はず、唯だ安逸を望むばかりで眞剣に覺醒しようとも思はない心ですが、それだけに最も根本的なものとして一名を「無明」とも云ひ、佛教の消極的な目的は之を破ぶることに集中されて居りますし、積極的の「覺」も此の「無明」の反對のものに外ならなものです。

前に挙げた貪、瞋、慢も畢竟は此「痴」の爲に分を越して

「過分」となるからいけないのでありませう。「自分」の「分」が素直に守られてあれば大した禍ひともなりませんまいけれども、始終「分」を越すものですから、私達の一切の精神活動を「惑」の状態に導き、其結果として煩悶苦惱しなければならなくなるのでございませう。

ですからかうした本能的なものを自分の力でスツカリ屈服させることは、中々困難な譯でむしろ出来ない事かも知れません。

此處に念佛信仰の偉大なる力を見ることが出来ます。

少くとも如來様に歸明信順する心を得ますれば、おのづから私達の穢ないこの意欲が淨化されて段々「本能」の跋扈跳梁を食ひ止めることになるからです。

五 つ の 蓋

然し乍ら、信仰に入りましてもまた此本能的な意欲が出て参りまして、信仰の増進を邪魔いたします。之れを「五蓋」と云ひます。

「五蓋」の内容に就ては多少の異同がありますし、元來は聖道門の修行の上に云つて居ることで、信仰上で申すものではありませんけれども、實踐上には常に私達の心に出て來るも

のですから、今之を信仰向上の問題として反省して行きたいと思ひます。

第一は「食欲蓋」で、赤坊がすぐ大人になれないやうに、一度信仰に入つたからと云つて反省して見れば直ぐ完全の状態にはなり得ませんところから、多少あせり氣味になるものですし、また念佛して居りましても雜念や妄念がむらがり起るので、正念になつて「三昧」を得たいとか「見佛」したいとかツイ望みたがるものでございませう。然し之は「有所得」の欲望でありまして本物とは云はれませう。

豫期しないところ、欲望を思ひ捨てたところ、大死一番して捨て身になつたところ、其處にのみ思はざる精神展開を覺えて大きな「法悦」を感じ、一層精進の心を奮ひ起さしめるもので御座います。

第二には「瞋恚蓋」です。腹を立てるくらゐ人間に取つて毒なものはありません。腹を立てると毒素が出來て周圍に其毒素が發散させるものとか云はれて居ます。況して信仰の上に腹を立てたら恰度「賽の河原の石積み」を鬼が來て突きこはすやうなもので、復舊するのに相當の努力工事をしなければなりません。

「いくら念佛しても進歩が見えないから」と癪に觸つて自ら

こはして見たり、或は信仰の意見の相違が出来て「一層やめてしまへ」などと腹を立てたりすれば、折角築き上げた心の中の「信田」が荒れてしまひます。

永遠の命を求めんとするものが、些細な事から腹を立て、それを捨てるなど云ふことがあつてもよいものでせうか。

不完全な人間同士の間ですもの、假に何かの行違ひはありませうとも、つまらない事で「人間一生の大事」を失つてはなりません。何が損だつてこれ位大きな損はありません、命にも替へられない大損害です。

第三の「疑蓋」或は疑が病氣にかゝつた「癡蓋」は無論「信」の反対心情ですからいけないものであることは云ふまでもありません。「疑」は事をやぶるものです。「君子は弊らず」と申しますが「弊」を「やぶる」とも讀むやうに、全く大きな「弊害」であります。

第四は「昏沈蓋」又は「昏沈睡眠蓋」と云つて「睡眠」も此中に加へてあります。「昏沈」と云ふのは氣が沈むことであり、氣の弱いことであり「覺醒」とは反対な心狀であります。また朦朧として睡眠するが如くせざるが如き妄我の状態やコクリコクリ居眠りするのなどもいけないことです。

睡眠不足ですと、念佛し乍ら居眠りの出る事もあります、

かう云ふのが癖付くと、何時でも念佛するとすぐ居眠りをするやうになつてしまひます。

第五は「掉舉蓋」又は「惡作」を加へて「掉舉惡作蓋」とも申します。「掉舉」とは氣の浮き立つこと、つまりはしやぐことです。信仰は眞面目でなくてはならぬのに輕佻な氣持で自分の信念を増進させることは絶対に出来ません。また「惡作」は「一に「あさ」とも讀み過去になした仕業を悔むことで、念佛して居ると色々な雑念が湧いて來ますが、其中でも過去の惡業に對する悔恨の情は其人の心を強く刺戟して遺瀨せな氣持にさせます。かうした場合は懺悔すればよいのです。懺悔は洗濯見たやうなもので清淨な氣持になれるものですけれども、多くは愚痴ぼく悔んで居て、ちつとも晴々した明るい氣持になれないで居りますからいけないのです。

いくら過去を悔んだところでもう仕方ありません。した事はした事で今更取り返へしはつかないのですから、如來様の前に涙を以て懺悔したらよろしい譯です。涙を以て此の「蓋」をとかして仕舞ふのが一番です。イヤそれ程の眞劍さがあつたら如來様の方で取り除けて下さるでせう。

また禮拜することなども懺悔の一方法で、昔しは寺ではよく惡戲小僧にはよく禮拜を課したものでした。

以上は五蓋を簡単に申したまですが、人間には此の「昏沈」と「掉舉」とは付きもののやうで、少し調子がよいと「掉舉」となり、反對に少し調子が悪いと悲觀して「昏沈」となり勝です。

人間を此の二つの型に分けて見ますと、男は「掉舉型」であり女は「昏沈型」であり、若い人は「掉舉型」であり老人は「昏沈型」でありますから、大體に於て「昏沈型」の人の方が多い譯です。其上幸運に恵まれた人は「掉舉型」であり不幸の人は「昏沈型」でありますから、愈々以て「昏沈型」の人の方が多いと云はねばなりません。

佛教では此病氣を癒す方法として「掉舉型」の人には靜慮がよく、「昏沈型」の人には念佛がよいと云はれて居り、支那などでは念佛と坐禪とが何のお寺でも併用されて居ります。無論その時の念佛は信仰上のものではなくて、心を對治する修養法として採用されて居るに過ぎないのですけれども、自力的な氣持でもさう云ふ効果があるとさへ云れて居ります然し乍ら淨土教では如來様の 大慈悲に感泣して行くだけで、自然に信仰が増進し自然に心が清められて行くとして居りますから、こんな「五蓋」など云ふやうな事を氣にする必要もなく、また自分が「何型」であらうと問題にすることもいらぬことで、隨て之は申しませんけれども、人間の氣持は

變なもので、一進一退我ながら不足がましい心も起り勝のものですから、云はゞ老婆心で御參考までに申して見たままでのものです。其邊誤解のないやうに御願ひいたします。

三障なき生活へ

とは云ふものの、反省することもなくノホ、ンに構へて居るやうでは是れ亦た本當とは云はれますまい。

現在になした罪は、それが大きい失敗であれば悔いる心も自然に起りますが、一寸したことでは「しまつた」と思ふ位のこととて、其場限りに忘られてしまふことが多いやうです。況して自分に氣がつかずに、他人に迷惑をかけ、或は他の人から擯斥されるやうな事をして居ることが決して少くないのに、元來氣がつかないことなのですが、考へて見れば誠に申譯のないことです。

經文の中には「水の滴り微なりと雖も漸く大器に滿つ」とありますが、全く小さな罪でも積み重なれば大きな罪を作つて居ることになります。少くとも私達に「手前勝手」な氣持の存する限り、屹度世間に對して少なからず迷惑をかけて居るに相違はありませんから「我罪なし」と威張つて居るとは到底出来ません。之に氣がついたら一心に念佛して如來

様の前に懺悔すべきです。

其上私達は前の世に於て何か咎度悪い事をしたに相違ありません。現在色々な事で苦勞して居るのが其證據です。

自分の意識の中にないかたと云つて平氣で居るのは反省心が強くないからです。現在に於てさへ氣がつかずに随分他の人々へ迷惑をかけて居るのですから、それから類推して見ても、さう斷定すべきではないでせうか。

加之、前に申しました本能的な「惑」の心があつて私達の心を常に濁らせ常に垢付けして穢なくさせて居るのですから、反省しても反省しても、あとからあとから、煩惱の鎌首を擡げ、濁流の中に流轉して居る譯です。

善導大師は此三つを黒黄白の「三障」と云つて懺悔すべきだとすゝめられて居ります。

佛名會と云ふのは毎年十二月中の釋尊成道の日を中心に、佛名を唱へて懺悔する行事で、支那日本を通じて行はれ、昔は宮中でさへ行はれたものですが、淨土宗などでも現に年中行事の一となつて居ります。其「禮懺儀」の中に

「無明に盲ぜられて久しく本覺の路に迷ひ、妄想に封ぜられて永く出離の計を忘る。三業四儀のなす所、皆是れ惡趣輪廻の苦因、歷緣對境の發所、豈苦海沈淪の妄業に

非らずや。經に曰く一人一日の中に八億四千の念あり念々の中の所作皆是三塗の業なりと、一日既に兩り、況や多年の罪障をや。悲しい哉未來無窮の生死、出離期なきことを。

痛しい哉罪業深重の凡夫、拔濟何れの人ぞや。佛名經に曰く凡夫罪障垢穢の身は百千劫を経て洗へども淨め難し、唯禮懺清淨の水のみありて衆生罪業の垢を洗ふべしと云々と云つて居ますが、私達は之を讀むごとにおのづから涙の滂沱たるものを覺えます。本當に何一つ録な事の出来ない私です。何をやらせて見ても耻かく事ばかりです。

罪障業障煩惱障の三障にさへられて、本當に心から自分の生活を拜むことが出来ないのです。

悔んでも悔んでも悔み足らない生活です。

だから如來様に依て慰められ如來様にのみ此遺瀨ない心を訴へるより外に手段も方法もありません。

如來にすがつて行く生活！こゝにのみ私の生きて行けるものを感じます。其處にのみ私の生活の清まるものがあるらうと確信して居ります。

あゝ「いつ紫の色に見なさん」です。噫「何時紫の色に見なさん」と念じつゝ唯だ如來様にのみお委せするより外はないと信じて居ります。



教典を背にラマ廟の周囲にお百度を踏むラマ教徒——(眞宮周報より)

喇嘛教徒と日本

執知恩院 小林 義道

ラマ教などと言へば、現代の世界には殆んど何の交渉もない過去の民族、夢の國の宗教たゞ人類學者か、餘程好事家の骨董的對象であるより外には用のないものの様に考へられて來たのであるにも拘らず、甚だ奇體なことながら、此の「喇嘛の國」、迷信、頑愚、無知、素朴そのものの如き蒙古より西藏の住民が今現實の世界政治解決の鍵穴となつて所謂先進文化國民の指導者達を悩まし、どんな鍵が合ふのだらうかと、一生懸命に合鍵の製作に智慧を絞つて目下苦心の最中であるのは何んと皮肉な話でないか。

エログロの宗教、喇嘛教徒がそれでは現實の日本とどんな關係にあるかといふ方面に就いて少し話して見よう。

アジアの地圖を擧げて見ると、誰でも先づ眼にとまるのは、支那本部の北境に東は渤海灣の山海關より、西は青海の北にまで蜿蜒と長蛇の陣を張り廻らした萬里の長城であるが、あの世界に二つと無い大土木工事を成し遂げた漢民族の偉大なる能力に感嘆する者は同時に過去三千年來絶えず北方より漢民族を壓迫し彼等にとつての恐怖の的となつてかくも大層な防禦方法を講ぜしめた蒙古民族の勇猛果敢さに驚異の眼を見はるであらう。

ところがかゝる輝かしい歴史を持ち會ては世界史上空前の大帝國を建設した蒙古人も清朝二百七十年間の巧妙なる懷柔政策の結果は

エログロの宗教、喇嘛教徒がそれでは現實の日本とどんな關係にあるかといふ方面に就いて少し話して見よう。

すつかりその勇猛性を失ひ、人口は減少の一路を辿りやがては地上にその姿を消してしまふのでは無いかとまで危まれたのであるが、時世は遷り状態は一變した。アジア復興の大旋風はこの邊疆に假死状態の瞋眠を續けてゐた蒙古民族にも手きびしい警策を加へ初めた先づ清朝の滅亡、國民革命政府の出現は支那の對蒙政策を一變せしめ、從來の懷柔政策に代はるに壓迫政策を以てする様になり、東は滿洲方面から南は察哈爾、綏遠方面より漢人の移民はどし／＼と蒙古民族の居住地帯を犯し初め、彼等の遊牧地帯は忽ちの中に漢人の農耕地と化し彼等の唯一の安息所であり、崇敬の的であつたラマ寺廟への政府の下附金は中止せられ、今まで蒙古人の男子の約半分を收容して安樂に生活せしめてゐた様な餘裕は全然なくなつた。加之北方よりはロシアの勢力がぐん／＼と侵入し帝政ロシアに代はつてソビエットの共産政府となつてからは宗教彈壓政策で以て外蒙古に於けるラマ教寺廟は根柢よりその存在を覆がへされる様にな

り、こゝに蒙古民族は是が非でも今までの生活様式を一新せずには居られない最後の土曜場に突落されたのである。この意味に於いて國民政府並びにソビエトロシアの嚴酷なる對蒙政策こそは私をして言はしむれば實に滅亡の一路を辿りつゝあつた蒙古民族に起死回生の一喝を與ふる大慈悲の善巧方便であつたのである。

曾て有名なる蒙古探險家ボズドネフ氏は蒙古民族の將來に關して「アジアの遊牧民はアメリカ及びアフリカの土人が吾人の眼前に於いて滅亡しつゝあるが如く、不幸なる運命が彼等を全滅せしむるまで、彼等は永久に遊牧民たる域を脱し得ないものの如く考へられる」と語つてゐる。又蒙古研究家ア・ペ・ボロバン氏は次のやうに述べてゐる「蒙古の官吏は異口同音に旗の人口減少を唱へ、蒙古の古老もその事實を肯定してゐる。吾人の見るところを以てしても、人口上より見たる蒙古は明かに退歩の路をとりつゝある」と。

成程男子の人口の約半分を喇嘛僧にして終

身獨身者とし、性病殊に梅毒が全人口の過半数にまで蔓延し而かもその豫防や治療に對して何等の手段をも講じてゐないといふ状態では如何なる民族と雖滅亡の一路を辿るより外無いのは敢へて不思議とするに足らない。寧ろ斯くの如き最惡の條件を具しつゝあつたに拘らず人口の減少が今日の如き程度に止まつてゐるのを見る時、若し彼等より右の如き惡條件を除去したならばその將來に於ける民族發展の勢が如何に強烈なるものとなるであらうかは想像するに難くない。

現今日本では滿蒙と言ふ言葉が盛んに新聞雜誌などに見えるのであるが其の中滿洲國と日本との共存共榮の關係は略了解が出来ても蒙古の方に至つては一つも認識が十分でない様に思はれる。先達ても私は偶々滿蒙讀本と題する小冊子を書店で見つけてその中の蒙古の部分を開いて見た處が「世人は蒙古蒙古と喧しく言ふが所謂今問題の蒙古即ち德王を中心とした察哈爾、綏遠の内蒙古人といふのは、その人口は僅かに三十萬に過ぎぬのである」

云々と如何にも之れを軽く取扱ひ、世人の關心の強くなつたのを却つて蔑る様な態度を示して居たのを見たのであるが、私は今此の機會にかゝる見解の認識不足を是正して置きたいと思ふ。

一體現今所謂蒙古民族といふものは凡そどれ程人口があるのかといふと、先づ滿洲國內の興安東、西南、北、四省、熱河、綏州、龍江、濱江各省を合せて略々百八十萬人。察哈爾、綏遠二省の所謂內蒙古自治聯盟内に三十萬人、ソビエツト治下の外蒙古二十六萬人。寧夏、甘肅、青海、新疆、各省に凡そ五六十万、計四百萬人位のものである。その中の三十萬人といへば殆んど一割に足らぬ少數の內蒙古自治聯盟ではあるが、然しこの內蒙古人はその居住地の位置が全蒙古人地帯の中央にあり、即ち東は滿洲國蒙古と一連の關係を保ち、北はソビエツト治下の外蒙古と接し、西南には目下國民政府の支配下にある寧夏、甘肅の蒙古人と隣してゐる關係上、內蒙古人の動きは直ちに全蒙古人の動向に影響し、従つて內蒙古人の

對日本の態度は外蒙古及び寧夏、甘肅全蒙古人の對日態度を早晚引きずる可能性がある。而して全蒙古人が熱心なるラマ教徒であり、彼等が西藏の首都拉薩を聖地とし此處への巡拜を以て一生の最大目的と考へてゐる様な關係上蒙古人の對日的態度はやがて西藏三百萬民族に影響を與へること頗る大なるものがあることを忘れてはならない。此の點に於いて對蒙古人政策は同時に對西藏人政策をも含むものと言ふことが出来るであらう。

ニユーヨークタイムスの支那特派員で東洋通として有名なるアーベント氏は言つた。「世界の屋根の上で、中央アジアの幽谷の中で、面積フランスの二倍に達し、印度の窮極的支配の戰略點たる西藏の將來と云ふ問題は極東の均衡に極めて危険な影響を及ぼすものである」と。その西藏は一九三三年、親英派の噶喇喇嘛が死去して後、當然その指導權は班禪喇嘛の手に移るべくして、而かも國民政府が多額の援助を惜まず、班禪喇嘛を入藏せしめむとしたが、遂に班禪は其の目的を達し得ず

して昨年の秋巡歴の旅先きでこれまたその多難な生涯を終つた。かくて今や西藏は何處へ行くか、今後の西藏人を指導するものは誰であるか。喇嘛教の元首たる噶倫、班禪の後繼者を先づ決定してかゝることが、第一歩であるがその決定の役目をなす者は、順序上後藏の安欽呼圖克圖である。彼は今北京に在住し、日本の手厚き待遇を受けつゝあり、昨年は滿洲國皇帝を新京に訪れて、御親謁の上政府の各方面とも懇談を遂げた模様であり、彼が現在的心境は非常に親日的であることは將來西藏に歸つた後は日本へ留學生を送り度いと私に熱心に語つたことから推しても十分想像し得らるゝのである。

曾てはロシアと英國との暗闘の中心となりその結果兩國の同意によつて、一種の政治的眞空として存續を許されて居た西藏、こゝにも復興アジアの息吹きが強くかゝりつゝあり、舞臺の幕が開かれた時は日本が如何なる役目を背負つて登場するであらうか。今は幕間の準備工作最中であるが、抑々印度が大英

帝國の心臓であり英國のアジアに於ける一切の活動力の源泉地であることは、今更言ふまでも無いとして、此の印度の北に境を接し、下り坂の坦々たる山間の道を容易に印度に這入り込むことの出来る西藏と若し日本が親善の關係を結び、蒙藏地帯より専らラマ教徒の住居する寧夏、青海を通つて西藏へ安全に通することとなつた時、に於いて、日英の對立地位はどう云ふ形勢になるであらうかを考へて見ると、私は愉快でたまらない。

最近ヒンドウ・マハサバ會長サバルカル氏はマールラストラに於いて開かれた國民義勇軍大會に於いての演説中に「今日の印度に於いて哲學書よりも一挺の銃の方が著しき價值を有することを忘れてはならない。我が印度には多數の圖書館があり、文學者も詩人—その中にはノーベル賞を受けた—も多數あるが、英國から奪はれた自由を恢復するには何の役にもたぬ。然し我々にして武器さへ具へれば英國は敢て恐るゝに足らぬのである」と述べてゐる。

ヒンドウ・マハサバといふのは三億二千萬のヒンドウ教徒の團結機關であり、曾て東京で行はれた、汎太平洋佛教青年會議には招待もされざるに態々數名の代表を日本に派して大會に參列せしめ、我等も佛陀の崇拜者なりといつて讃佛文を朗讀した。また昨秋印度國民會議派が日本品ボイコットを決議した時、かゝる決議は印度の輿論を代表するものにあらず、少くとも三億二千萬のヒンドウ教徒は之に反對すとの決議を發表した。あの親日的精神に満ちた團體である。印度人への武器供給、之れは英國にとつては何よりの痛手であり、英國を抑へるのに之れ位の急所は無い。現在英國が香港、廣東を通じて支那へ盛んに武器を供給しをることに對し、日本朝野は擧げて憤慨し、氣の早い連中は香港をやつてしまへなどと口惜しがつてゐるが、英國に見れば一向に手懸へが無く、日本の抗議など何處に風が吹くかといった調子であるが之れは急所を抑へずに掛つてゐるからである。

支那本部を取り巻いて遂には英國の最大急

所印度に通ずるラマ教徒地帯は日本の大陸政策實行の上に如何に重要なものであり、従つて七百萬人のラマ教徒への日本佛教徒の働きかけが刻下緊急の事務であることは、以上の話だけで十分御了解を得ることと思ふ。

パチンコ 田村辰三

『漢奸！ ソコウゴクナー！』



血^ちしぶきの法將^{ほつしやう}

— 住蓮^{ぢうれん}と安樂^{あんらく} —

飯田光明

鈴木金平畫



五、欣求淨土

一

苦悶のない臨終のさまを、「眠るが如く」とよく形容せられるが、實際鈴虫は自分で安心し切つてゐて、

「往生は一定でござります程に……」

微かなこゑでさう言つたあとは、昏々と眠るやうにして、靜かに目を閉ぢて逝つたのである。

見るかげもなく瘦せこけてはゐても、天稟の美はしい容貌は、そのために衰へはしなかつた。あの崇高な能面——、松虫の臉に映るのは鈴虫の臨終である。こゝろ一杯に轉生のよろこびを感じてゐて、いささかも今生に執着しなかつたばかりか、必得往生を確信してゐる鈴虫の面には、苦しみの代りに絶えず微笑が浮んでゐた。しかし、さすがに永久の別れを惜しむ愛惜の念を短い言葉に托して、

「随分とご健固に……」

滅入るやうにさう言つて涙ぐんだ、あのさびしくも崇高な面持ち——。松虫は一しきり、骨身を刺されるおもひで鈴虫の臨終を描いてみるのだつた。

愛別離苦の悲しい感情に、強ひて耽らうとするのではなかつたが、松虫の胸には、まさまざと果てしない幻影になつて、鈴虫の臨終が再現して來るのである。それにしてもあの確信——、往生を信じ切つて

ゐて少しも動ぜず、九品の何れに生れ合はせようと、この上の喜びはござりませぬ——、さう言つて稱名を續けてゐた鈴虫。

「ご立派でございました。お見事な御往生でございました」

思はず獨語してほろりと涙ぐむのだつた。

松虫は自分を淺ましいものと思つた。若しもあれが妾の臨終だつたら、妾の心はどんなに顛倒し、錯亂し、どのやうにか失念して、みにくいさまを暴してゐたか知れないとも思ふ。

同じ一座の御説教——、今年の夏のことだつた。たま／＼清水寺へ參詣しての歸るさ、はからずも、鹿ヶ谷の庵室で吉水上人の御化導があるといふことを耳にして、鈴虫と二人、鹿ヶ谷まで足を延ばしたことがある。そして上人お自らの有り難い御法談を聴聞して、感激にむせんたのであつたが、今の松虫にはその御法談すら思ひ出すことが出來ない。耳に残つてゐるのは、あの翳々たる禮讃の旋律だけ。同じ御法談を同じやうに聴聞したのに、あゝ、何といふことだらう、罪が深いとでもいふのだらうか。何といふ悲しい我身だらう——、思へば思ふ程、安らかに眠つて逝つた鈴虫が、尊いものになつて松虫の胸を去來するのだつた。

やがてのこと、松虫は思ひ出したやうにつと立ち上り、念持佛を安置した前に、朱塗の文臺を据ゑて白布を敷き、今は小さな木箱に納められた鈴虫——、さつき、遺骸と別れるときに、泣きながら念佛を稱へて、悲しさにをの／＼手で切りとつた鈴虫の髪、その黒髪のは入つ

た木箱を、文臺に乗せてまつるのだつた。

燈を献げて坐り直し、しげ／＼と木箱を見て合掌するのだつたが、忽ちのうちに涙が湧いて出て、白い木箱の輪廓を曇らせてしまつた。

「あゝ、鈴蟲さま！ 何といふ變つたお姿に……」

ほとばしつて出た自分の言葉に、涙が止めどもなう誘はれて出るのだつた。

咲尾は咲尾で、先程から几帳のかげにかくれて泣いてゐる。

つい半刻程まへ、日が暮れてからのことだつた。鈴蟲の遺骸は、郷里の大洲から遣はされた近親郎黨の人々に守られて、淋しくこの部屋から消えて行つたのである。

咲尾は遺骸にとり纏つて離れようとはしなかつた。人々のなだめ慰める言葉も肯き入れず、狂氣したやうに泣き纏るのだつた。

「ご分別おし、咲尾さま！」

松蟲のやさしく止めるのもきかず

「おかまひ下さいますな、松蟲さま。大洲へ歸るのでござります。旦那さまのお供して、お供して——、妾は旦那さまの侍女でござりますものを……」

「でも、主上の御ゆるしがござりませねば……」

「どのやうなお咎めを被りませうとも嫌でござります。御所はもう嫌でござります。お局とお局、女同志の醜い諍も、もう見きゝするの

が嫌でござりますす！」

「しつ！ おこゑが高い！」

「は、はい」

「ほんとうに咲尾さま、御分別なさりませや」

「あゝ、でも、——旦那さま／＼！」

わつと泣き伏して鈴蟲の骸にとり纏るさまは、まこと、正氣の沙汰とは見られなかつた。

無理もないことだつた。朝から精々として、室の調度をあれやこれやと／＼りかたづけ、自分の衣類も、鈴蟲の品々も、丹念にまとめ上げて、私に郷里へ歸れることを楽しんでゐたのだ。松蟲とも別れの言葉をとり交して、

「これきりでお目もじ出来ないなど、そんなことはござりません。旦那さまのやうに、お淨土とやらへ旅立つてしまひましても、また再會のときがあると申しますもの」

さう言つて笑顔をつくつてゐたではないか。

すでに眼腔は落ちくぼみ、皮膚は濁つた血いろを浮かしてゐて青味の勝つた紫に——、唇は土色に、かつては崇高な能面のやうだつた鈴蟲の死顔は、今は全く見るかげもない。その面を、覆ひの白布をとり除けて、麝香を溶かした水で拭いたり、沈木を焚いたり——。そして鈴蟲の遺骸に、

「旦那さま、今日こそ大洲へ歸るのでござりますよ。嬉しゅうござります

せう」

自分の思ひをそのまゝに、こんなことを言つたりして、松嶋とも別れを惜んでゐたのだつた。鈴嶋の遺骸を守つて大洲へ歸れるものと、朝早くから今の今まで、咲尾も信じ、松嶋もさう思つてゐたのである。悲しい旅ではあるけれど、また一面、嬉しい旅でもあつたはず。だのに、その喜びは一瞬にして覆へされてしまつたのである。所詮、はかない夢でしかなかつたのだ——、といふのは、咲尾に主上のおこゑがかゝつて來たからだつた。

うるはしい希望の峯から、あつといふ間もなく、千仞の谷底へ、蹴落されたのも同じだつた。這ひ上ることはとうてい出来ないと思ひながら、渾身の力を絞つて緊縛から脱れようと足掻くのだつたが——。

鈴嶋の遺骸は、近親の人々によつて館から連れ出され、折から迫つて來た夕闇の中を、駕籠に乗せられて大洲へ歸つて行つたのである。

とう／＼取り残されてしまつたのだ——、この二三日といふもの、あれを思つたりこれを考へたり——、泣いて／＼泣き疲れた咲尾。ああ、とう／＼取り残されてしまつたのだ——。弓も張も一時に消え失せて、頭の中には、たゞ白い霧が一杯に擱がつてゐる。その虛ろになつた頭が、郷里を戀ひ、主人を戀うて止まないの——。骸を乗せた駕籠を中にして、一步步、しづ／＼と大洲へ近寄つてゐるであらう一行の旅を、咲尾は泣きながら追うてゐるのだつた。目に見えない大きな力で、しつかりと緊縛されてゐる悲しさ—— 乙女心に思ひつめた

一徹さは、どんなに泣いてみたところが怯むものではないのに——。

二

やう／＼のことに涙を拭うた咲尾は、呼ばれるまゝに松嶋と並んで坐つた。もう泣くまいと決心して來たのに、小さな白木の骨箱を見ると、また熱いものが込み上げてくるのだつた。涙のきら／＼と光る目で、ちつと白い木箱を見た。

松嶋はいたはるやうに、

「涙はほとけさまのお嫌ひものとやら、お泣きなさるなえ、お泣きなさるなえ」

「はい」

「そして、心を靜かに保つて稱へてごらん」

「あのう、なむあみだぶつでござりますか」

ちらつと松嶋を見て言つた。美しく澄んだ聲だつた。

突差に、松嶋はぞつと冷たいものを感じた。そして自分でもをかしい位、動悸が高う打つて來るのも覺えた。まあ、何といふ魅力に富んだ身振をする人だらう——、抱きしめて、抱きしめて、強う頬ずりしてゐたい衝動と、嫉妬にも似た感情とが、一瞬のうちに紛れ合つて松嶋の胸に込み上げたのである。

こゝろもち斜に身體をくねらせて、ちらつと上目をつかつた眸の、あの美しい輝き——

松虫の胸はあやしく騒いだ。丸二年このかた、こんなことはついぞなかつた。嫉妬！ 嫉妬！ これを嫉妬といふのかも知れない——、しかし、松虫は不思議に思ふのである。もしもこのやうに騒ぐころが嫉妬の萌たとするなら、何故々々、咲尾などに？——たかゞ自分とは同じ女房に仕へる侍女ではないか、てんで問題にならない、敵ぢやない！ 長の月日、二年のあひだといふもの、自分の地位と比べてみては私に蔑すんでゐた咲尾。さげすんではゐても、何故か妹のやうな親しみと可愛さを持つてゐる——、その咲尾に嫉妬などどうして

感ずるのだらう。松虫は不思議に思ふのだつた。しかし、この思ひは忽ちにして消えていつた。今宵の咲尾をもう鈴虫の侍女でないことに氣がついた。主上のおこゑが、かつて大洲へも歸らなかつたのだ、主上のおこゑが、ほんたうに主上お直々の思召しからかゝつて來たのだつたら、もう油斷は出來ない、自分の上を飛び越えて、お側近くへ侍ることになるかも知れない——、先程、咲尾に足止めが傳へられて來たときも、ふとこんなことを思つたが、それが再びはつきりと浮んで來るのだつた。嫉妬！ 嫉妬！ 矢張りこれを

嫉妬といふのに違ひない！

こんな思ひをするのは始めてのことだつた。このやうな胸騒ぎが、ほんとうに嫉妬の萌となるのだつたら、あゝ、これからの先、咲尾と自分とのあひだにどのやうな業火が燃えさかるやも計られぬ。松虫は遣る瀬ない哀愁を覺えるのだつた。

松虫はぢつと咲尾を見やつた。紙燭の明りを横に受けてゐて、仄かな影が咲尾の顔にさしてゐる。そのために際立つて美しく見えるのであらうか、均齊のとれた咲尾の顔は、まだ明けやらぬ淡闇の中に、たつた一つぼつかりと咲いた白蓮のやうに見





えた。濁りのない純真な咲尾のこゝろが、白蓮になつて表はれてゐるやうにも見えた。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」

泣き止んできちんと合掌し、健氣にも主人の冥福を祈りつゞける咲尾の姿は、崇高と言はうか、聖純といふか、淵のやうな静けさをたゞへてゐて、稱名を續けてゆくのだつた。

見てゐるうちに慚愧の情が湧いて來た。

「勘忍してたも、勘忍して下されや」

口にこそ出さね、腹の中で勘忍して下されや、勘忍して下されや、松虫は咲尾を拜みたい氣持で、何度も何度も呟くのだった。

作者附記

七月號「鈴虫の死」から「欣求淨土」の終りまでは、少しも史料に縛られず、全く興趣の湧いて出るまゝに、私は「私の松虫」と、松虫を通して當時の世相、信

仰界、院の生活、女ごゝろ、さう言つたものを偶然と描きたかつたのですが、いろ／＼な事情のために「欣求淨土」を書きさして中斷せねばならぬのを遺憾に思ひます。ほんとうは「欣求淨土」を全部書き綴つてから中篇を終りたかつたのですが——。それで、「欣求淨土」の三以下を構想成つたまゝに略記して、最終篇との聯絡にあてたいと思ひます。

その三——、翌日のこと、咲尾に奥からのお召しが傳へられて來た。咲尾の嘆きは一通りではなかつたが、ふた刻と經たないうちに、咲尾は見違へる程晴々としてゐる。湯から上つて來た咲尾は紐一杯に几帳を張つたかげで、はらや（水銀で作つた白粉）を塗つたり、眉を染がいたり、齒を染めたり、紅をさしたり——。松虫と松虫の侍女は、咲尾をたすけてぐしをとつたり、衣裳をつけてやつたりした。化粧が進むにつれて、咲尾はいよいよ天稟の美を發揮して來る。と同時に、松虫はまたしてもあやしい胸騒ぎを覺えるのであつた。その四——、咲尾が打つて變つたやうに晴々と化粧をしたわけは、松虫が自分の意中を語つて、咲尾にも院脱出を誘つたからであつた。云はゞ、かりそめの女房になりすまして、こゝ二三日を辛抱しようとする氣安さが、咲尾を明朗にさせてゐたのだつた。晝すぎからとう／＼雪になつて來た。前ぶれのやうに、一ひら、二ひら、舞ふて落ちる雪を、松虫は見つめながらも思ひに耽つてゐる。かつて大恩寺焼けの晩に、鈴虫が院脱出を企てゝゐるのを、自分が引め止めたことや、その鈴虫が死んでしまつたことや、自分もあの頃

から宮仕への辛さを思ひ續けて、脱出の機會を待つてゐたが、その機會が二三日のあとに迫つてゐることなどを思ひ續ける。ところへ慌しく衣ずれの音を立てゝは入つて來た咲尾は、何も云ひ得ず、わつと松虫の膝に泣き崩れる。意外なことは今日から咲尾はもう「咲尾」ではなく、「鈴虫」と名を改めねばならなかつたことである。その五——、院での女官の生活は、華やかな裏面に絶えず涙がつきまといふ。彼女達の大半は、權勢とか、政略とかの用具にせられてゐるやうなものだつた。（江戸大奥の生活とは似てその趣を異にする）然し、涙に濡れながらも女らしい暗闘は互に絶えなかつたのである。自分の運命を呪つたり、世を憐れんだり——。法然上人の教は、かうした女人の間に迎合せられぬ筈はない。他力本願、女人往生、専修口稱、はつきりと覺えぬまでも、彼女達には明るい心の糧になつてゐたのである。

その六——、昨日にも増して美しい女房姿の鈴虫（咲尾）を見ると、松虫の嫉妬はつるばかりだつた。自分でも淺ましいことだと承知しながら、どう制することも出來ない。そのくせ「勘忍して下されや」今度こそほんとうに懺悔しようと思つてゐる。咲尾が憎いのではない。寧ろ咲尾の聖純さに頭が上らな氣持なのである。心が少しも定らず、深いデレンマに落ちてゆく。自分一人が院を脱出すべきか、咲尾の鈴虫を誘ふべきか、誘ふと共に出家するには餘りにも自分の仕打が残酷に思へる。遂に脱出の機會が來た。建久元年十二月の九日、主上は熊野の三社詣でに御臨幸なつたのである。（中篇完結）



北海道 中村 もん
朝霧の晴れて洞爺に蝦夷富士の倒
影きよき夏のあけぼの

(評) 一讀して清涼なる景趣を傳へる作である。

朝 鮮 羅江八年坊

み佛を疑はざればひもすがら念佛
のみちに云ふこともなし

(評) 信仰の眞實にふれた人の心はかくも安らかなゆるぎのないものであらうかと羨まれる。

埼玉縣 小 濱 清 秋

病癒へし妻に手づから與ふれば仄
かにぞ立つ新茶の香り

(評) 病む妻をいたはる夫の心のうつくしさは茶の香りよりも猶高き香氣を放つたであらう。

神奈川縣 小 宮 繁 八

藤木川水の鳴れるにひぐらしのこ

あさへ添ひて湯の町の暮る

岡山縣 史 枝

ひとところ山畑黄なり麥秋の日に
輝きて明日も晴るらん

京都市 永田 七郎

迷ひより迷ひに移る人の世を明る
くてらすみ法にぞ逢ふ

千葉縣 高橋 美矢子

里人は田畑に出でて家々の眞晝し
づけし鶏のなく

富山縣 藤田 四三句

君がため命ささげしますらをのみ
鑑むかふる今日ぞ悲しき

東京 三浦 頑子

われの繪をささげしひとは傷重り

ねむるのみなり繪も見えざらん

岡山縣 野 藤 華 舟

樹のしづくこぼるゝほかに音たて
て子のさす傘に柿の花ちる

長野縣 宮 澤 榮 子

力あるかぎり正しく生きんとぞ打
てば木魚の音の高なる

大阪市 吉 廣 夏 生

山かげのいみじく荒れしおん寺の
ほとりにききぬせせらぎの音

福岡縣 佐 藤 刻 木

嵐やみ靜かに風の吹きければ竹の
しづくの苔にしみ入る

京都市 三野 輪 江 雪

熊笹に道せばまれて霧ふかし友は
語らずひたひたと降る

朝鮮 球 廊 蘇

籠たく婦も手をやめてきき入りぬ
徐州陥ちぬと傳ふるラヂオ

埼玉縣 小 濱 清 秋

道求むたつきはわびしあじきなし
登しき花に心なくさむ

京都市 清水 操 子

今日とても慰問の品を前にして兄
笑むらんと胸にゑがきぬ

大阪府 小山 文 二

かそかなり南天の花の花びらのこ
まごま白う庭にちりしく

北海道 寺 田 福 山

我を捨て御國のためにいそしむは
やがて菩薩の修業なるらん

飯田市 宮 澤 康 子

梅雨晴のいまひとゝきを蟬鳴きて
今宮が原鳩のとびゆく

栃木縣 大 輪 清

夏の山の光りはしみぬ緑濃き衣吹
かせて晝たけにけり

北海道 花 田 順 住

乾きゆく小池の魚に似たるかな支
那の將軍支那の黨人

京都市 小 泉 妙 春

み光りのうちより燃ゆる何ものか
われを見つめてはづかしきかな

投稿規定

官製はがきに一四二首以内
とし、「淨土」編輯部歌壇係
あて送ること

筆 隨

われ生きてあれば

吉 田 絃 二 郎

今朝も郭公の聲に夢は破られた。

夜つびて夢を見てゐたが、その夢の跡を辿らうとしても何んな夢であつたか思ひ出せない。郭公は絶え間なく落葉松の間に啼いてゐる。

わたくしは落葉松の山の坂道を辿つて、かつて妻と二人で八年の間棲んでゐた山莊の方へ歩いて行つた。昔ながらに道は桔梗や鳥かぶとや、おけらやいろいろな草花に掩はれてゐる。小川の岸から玄關までの道はほとんど雑草につままれてしまつてゐる。家も荒れてはゐるものゝ昔のまゝだ。朝早く妻と二人で浅間を眺めてゐたころのまゝである。毎朝馬を繋いだ柏の木も大きくなつてゐる。いまにも小川の方からここに笑ひながら妻が近づいて來さうな氣がする。

谷をへだてゝ水鶏が鳴いてゐる。山鳩が鳴いてゐる。何も

彼も昔のまゝだ、わたくしは鎖された山莊に面して合掌した。

いつの間にか朝の日の光りが浅間の煙に反射しはじめてゐた。かつて故人とともに登つた浅間の山徑も白々と日の光りを浴びてゐる。

昨夜、夜の更けるまで若い宿の主と語り合つた死の世界について考へたりして落葉松の間の小徑を歩いた。黒つぐみも昔のまゝに鳴いてゐる。

自然も一切も昔のまゝである。人間のみが變る。死ぬる。しかしこまかに觀察すれば自然も一再も絶えず變化してゐる。そこにも刹那々に死があり、變化がくりかへされてゐる。

わたくしは山徑を歩いてゐる間にもかつてそこに在り、そ



して今は形をも残してゐない老木を思ひ出した。否或るものはわづかに朽ち果てた切株のみを残してゐた。しかもそこには何等哀哭の痕跡もなく、愁傷悔恨の名残とても見出されな。い。わたくしは黙々として聳え、黙々として伐り倒されて行く老木の運命を想ふ。生きるがまゝに生き、死ぬるがまゝに死んで行く老木の偉大なる姿こそ尊いかぎりである。

黙々たる老樹、黙々たる老石なればこそ佛陀のために、跏趺坐の席たり得たのである。人間は木石たり得ないといふ。然り人間は木石ではない。しかしかの一石一木の生死一切を大自然の宿命のまゝに委ね切つた尊い姿は、わたくしたちにとりてありがたい悟の相を暗示してくれるではないか。

このごろわたくしは鹿兒島に行つた。城山を背景に西郷南洲翁の銅像が新たに建てられてゐるが、街行く人々は必ず銅像の前に帽子を脱いで通り直ぎる。人情の厚き、まことに麗はしい光景である。

南洲翁の如き人は死を見る圖するが如しといふ悟りを持つてゐた人であらう。城山落城のをり翁は別府晋助に介錯を頼んだが、別に死を急ぎもしなかつた。別府晋助のやうな勇士でもいざといふ場合には多少、あわてるであらう。南洲翁はじつと押さへて置いて岩崎谷に來たをり「晋どん、もうよからう」と言つて従容として首をさし出した。死に面して「晋

どん、もうよからう」と、靜かに言つた南洲翁の悟りはかの巨木若石のそれではないか。

鹿兒島の純朴な人々の心もさることながら、南洲翁自身の大聖にも似たこの靜かな尊い悟りの前に人々はおのづから頭を下げるのもあらう。

x

わたくしはいろいろの宗教が死後をどのやうに説いてゐるかについて知らない。觀無量壽經あたりに説かれてある淨土の世界にしても、千人が千人自分の心の深さにしたがつていろいろに受け容れるであらう。

愛する者を失つた人々にとつては、瑠璃瑪瑙の殿堂や金葉金果の極樂境よりも、いかに荒涼たる氷の山、空漠たる熱砂の地であらうとも、せめてたゞ一度その愛する者との邂逅をこそ翹望する。近世の耽美派の人々は「戀愛なき天獄よりもむしろ戀愛ある地獄を選ばん。」と言つた。わたくしたちは、淨土を望む。しかしその淨土は金銀寶玉に埋められ、美花麗り、靈鳥囀る世界でなくともいい。淨土とはかつてこの世界に於いて偕に泣き、偕に怒り、偕に憤り、あらゆる人間の罪業を犯しつゝもなほ親しみ、慕ひ、愛し合つた人々がふたたび相逢ひ、相悲しみ、相懺悔するの世界であらう。わたくしは雲の上の淨土を欣求しない。たとへ地獄、煉獄の鐵鎖に



繋縛せらるゝ世界であらうとも、そこに父母と相會し、妻と再會せん機縁をのみ祈念する。

人は言ふであらう。かつて一度死したる者は永劫に再會するの機縁はめぐまれないと。しかしわたくしは敢て言ふ。かつて一人の機縁を恵まれたる者はないとしても、わたくしの悲しみは、わたくしのこの翹望はかならずや、わたくしの思念を貫かしむるであらうと。

かつて一人のよく成し遂げ得たるものなしといふ事實は、今日以後永久に人類の運命は然りといふ理由にはならない。かつて誰か人類に機縁の誕生を信じ得たものがあらうか。かつて誰か法然聖人の出現を信じ得たものがあらうか。一人の力は、一人の信は、過去の実をくつがへす。

わたくしは死後の再會を祈念する。

法然聖人は淨土にての再會を約束された。

わたくしには淨土に來るほどの力もなく、信もない。たゞ一切は死にまかせ、無にまかせ、佛にまかせ奉る。

たゞわたくしは地獄に於いても、砂漠に於いても、かつてありしわが親、わが妻との再會を信ずる。

x

今日見知らぬ人からのたよりを受け取つた。

「父は母を使に出しました。母は汽車に乗つて出かけました。父は母に對して、今日の中に歸つて來いと嚴命しました。母は無理に汽車に乗つたために落ちて轢死しました。父は自分が殺したやうなものだと言つて飯も食はずに男泣きに泣いてゐます。」

「死にたくないと思つた母は最後まで汽車の横管にしがみついてゐたさうです」とも書いてあつた。

亡くなつた母といふ人の心もわかる。父といふ人の苦惱もわかる。わたくしたちはたゞはつきりと嚴命しないだけのことである。すべての人は自分の周囲の人を死に近づけてゐる。

懺悔、懺悔、懺悔、最後まで懺悔するために、懺悔の一念に骨を削り、身を碎くためにわたくしたちは生きてゐなければならぬであらう。

x

x

x

x

x

x



俳壇

大田耳動子



父母の石碑建てけり桐の花
評 澁賀 豊田 綾子
桐の花の咲いてゐる時に御両親の碑を建てられたと云ふので、一見頗る平凡のやうに見えるが、桐の花の感じ、其の時候、そして句全體の調子から鑑を正さしむるものがある。更に同一作者の『桐の花好みし父の碑をきざむ』から作者の父上が桐の花を非常に愛されてゐたことがわたり、父上の命日が必ずしも桐の花の咲く頃ではなかつたかも知れないが特に其の時候を選んだと云ふことはさもあるべきであると思はれる。

西行法師の歌に『願はくば花の下にて春死なん其の如月の望月の頃』と云つたのを記憶してゐるが、父上は桐の花の咲く頃を願つてゐたかも知れない事が想像せられる。此の句から私も來年、父の墓を建てることにしてゐるので、父の好きな酒のこを思ひ『利酒に酔うて主の商へる』と云ふ私の句を刻まふかとさへ思つてゐる。
讀を詠つた句は、句の體態を超越いた迫力を感じる。

鐘の音のよき夕焼の家路かな
評 前句同様、平明な句である。只『よ

き』と云ふ表現は素晴らしい効果を擧げて句全體を支持してゐる。平和に澄んでゐる鐘の音を聞き乍ら、豊かな夕焼の下を歸る作者は『今日も亦好き日』であつたと感謝したことであらう。ミレー作の『イノリ』を想像させられた。
山ノ湯や蟬と驚鳴き競ひ
評 『箱根芦ノ湯』と云ふ前書がある。息をもつかず鳴き競ける蟬と、風驚即ち四方八方で啼いてゐる夏の蟬との對照が面白い。如何にも山の湯らしい。此の句から私の『のどかさや餌を争うて象と鳩』を思ひ出した。
椰子の葉に虹のかゝりて陽は西に
大日輪工場のみねに夕焼して
同 牛居 恵 隆
夕立のしぶきを呼びて葱草
愛 媛 千 葉 長 行
すゞしきは水田の影の青葉山
北海道 渡 邊 信 次
我寺の鐘の音遠く月に澄む
北 海 道 草 部 木 白 舟
明けゆくや海は涼しくうるほへる

雄々しきはさつき鯛の門出かな
大 阪 橋 本 い と 子
紫陽花の窓の邊白き夕かな
同 吉 廣 夏 生
抱れ來し子に春の陽のほひけり
和歌山 松 居 遊 月
働ける身の有難や田草取
飯 田 宮 澤 榮 子
出征の寺の梅雨守る女かな
朝鮮 羅 江 八 年 坊
菖蒲切る足に驚く大蛙
足立區 清水 操 子
蜘蛛の巣の露となりけり春の雨
京 都 福 島 孝 治 郎
五月雨に煙ふる比叡となりしなり
大 阪 林 正 俊
炎天にモンベ姿の應召兵
京 都 水 田 七 郎
河水の一雨毎に梅雨に入る
下 關 中 居 頑 龍
英彦山神社
行者像は夏のおぐらき庫に佇つ
山 口 長 岡 見 智
空鉢にみな草生ひて庭茂る
大 阪 清水 明 定
朝顔のたのしく伸びて垣根かな
松 山 中 廣 清 治
廻り居し起居老めく梅雨かな
石 川 西 村 けん 治 郎
色濃くも深山の驛の鬼あざみ
下 關 關 野 公 孫

青柳に憩へば胡弓流れくる
富 山 藤 田 四 三 句
子連れし雀遊ぶや麥の秋
小 樽 中 村 茂 壽
山の湯にひたりてをれば遠蛙
大 分 白 堂 柑 山 生
苗髪を結ひて子守する子達
岡 山 山 岡 順 虎
水灌ぐ夏菊鉢も新らしく
大 分 金 田 春 風
一枝の陽紫花塀の外に咲く
新 縣 州 球 磨 藤 雄
盂蘭盆やかたみとなりし日本刀
川 崎 玉 井 八 益
大露をかむり無縁の石佛
飯 田 宮 澤 謙 子
夕立の蟬鳴き止みぬ松の中
尾 道 葛 田 竹 郎
鶯の今朝も來てゐる裏戸かな
本 郷 新 田 眞 砂
蟬雲頻りに鳴くが雨蛙
中 田 間 瀬 龜 齡
子の寢息安けくなりし蚊遣かな
新 宮 奥 村 映 水
吊橋の眞下にゆるゝ夏の月
桐 木 大 輪 清
草刈るやあふれて清水吾を打つ

投稿規定
官製はがきに一回二句以内
とし「淨土」編輯部併係
あて送ること



猫に小判は、相應せぬたとへに申せしなり、人は其位、位の相應なるぞよき、不相應のおごりをなせば、たちまち身代かぎりになるなり身のほどをしれ、と申す口傳を、よくまもるべし。

(行誠上人文畫)

ふだらくの岸打つ波を安房の國の

那古の浦べに今日きける哉

これは明治第一の高僧福田行誠上人が房州那古の觀音に奉つられた歌の一首である。荒涼たる房州漁村の海邊に立つて、寄せては返す波の音に、觀世音菩薩が住み給ふ、かの補陀落の岸打つ波を觀ぜられた上人の貴い信仰がしみじみとこの一首ににじみ出て居る。那

房州に於ける行誠上人

醫學博士

和田正系

古の瀧は私の住む所から遠くない。春光運々たる夕べ、上人の跡を尋ねて那古の曲浦をそぞろ歩きすれば、實にこの短い一首の和歌は百千萬語の聖經にもまして深く胸を打つのである。

行誠上人は明治十六年房總地方を巡錫せられた。その紀行は「房總日記」と題して詳しく記されて居る。春も半ばの四月廿日、芝増上寺を立つて舟行。行徳に出られ、ついで陸路佐倉成田を経て東方、大網に出で、更に西行して姉ヶ崎、木更津、富津など東京灣の沿岸を南下され、金谷を過ぎて房州保田に入られた。それから海岸に沿つて房州を廣く巡錫せられ、殆んど二ヶ月を費して六月九日東

京に歸られたのである。私は房州に住んで居る爲め特にこの「房總日記」を興味深く拜見し、上人の足跡を追うて少し調べて見たこともある。その總州に於ける部分は又後の機會に譲り、今回は房州に於ける上人の後を慕つて、少しく回顧して見たいと思ふのである。

明治十六年と云へば今から殆んど六十年の昔で、當時の事は最早七八十歳の古老でなければ知らぬのである。思へば若い我等には想像も覺えない遠い時代の如き氣がする。この年行誠上人は七十五歳の高齢で、汽車も自動車も無かつた房州の地とて、二ヶ月に亘る長途の旅は随分困難せられたものではあるまいかと思はれるのである。交通機關としては

舟、人力車が主で、時として駕籠を用ゐられたやうである。

五月十三日の日記に

「曇りたれども、おだやかなり。松翁院に頭岩野氏より大船出して八反の帆をかけ、金谷へむけのり出る。波靜かに風もなし。船中法語したゝむるほどに、三里の海上金谷につく。……」

とある。この光景は恰も徳川時代の旅行記でも見る感じではあるまいか。金谷は上總の最南端、鋸山一重で安房に入る。今は鋸山

の隧道暫時にして汽車は房州に出るのであるが、上人は海沿ひの街道を通られた。このあたり東京灣の咽喉で對岸の三浦半島間近に迫り風景最も宜しき所である。日記には「十五日、朝晴。金谷發足。おくり十餘人、總房國界にてわかるゝ者は岩野氏なり。餘はみな送る。保田岩戸の觀音、行基大師の作などにやとおぼゆ。御丈は一尺餘り、古像なり。岩をくりあけ龕とす。老婆とも六七八人通夜なしゐたり。是より羅漢山嶮しき所なり。……」

鋸山の中腹には曹洞宗の乾坤山日本寺がある。上人は本堂にて齋食をとられ山中を巡拜して下山せられた。鋸山は今も四季遊覽の客、絶えざる房州隨一の名所である。上人はこれから保田海岸の別願院といふ淨土宗の寺に立寄られた。この寺は俗に「濱の寺」と云はれて居る、磯邊に近い小寺であるが浮世繪の大家菱川師宣の墓があるので知られてゐる。それから加知山村（今の勝山町）淨蓮寺や長谷寺の觀音に參詣の後、久枝村蓮台寺に到着された。久枝は今、岩井町に屬する。



食物に
對する

本能の誤謬

動物はその本能に委せて置いても體內に不足する養分を正しく食物から補充出来るかと言ふと、之に就いて面白い實驗があります。

例へば白鼠に白米團子と、白米に野菜類とビタミンを混ぜて作つた團子と兩方與へると、白鼠はビタミンの全くない白米團子を好んで食べ、瘦せ衰へて遂に斃死します。

之は生理的要求に對して本能が全然盲目であると言ふ一例であります。我々の食物に對する嗜好も玄米より白米が選ばれ野菜よりは肉類を好むのはどうする事も出来ぬ事實です。然し乍らその結果招來されるビタミンの不足は體內の生理的機能に種々の障害を與へるもので、腺病性虛弱體質、妊産婦の病弱、癩癧兒童、呼吸器系疾病

患等の原因の一半は明らかに偏食のよるビタミンA及Dの不足であると言はれます。

「理研」の純粋ビタミンA・D配合の「理研」ビタミンの常用は、かゝる營養上の缺陷を是正し、正しき健康の維持増進に頗る有効なることが認められて居ります。

理研ビタミンには服用し易い小粒製品もあり、五拾球入一圓卅、百拾球入二圓、五拾圓、全國藥店百貨店藥品部に販賣

「此あたり雨ふる。田路をへて久枝村蓮台寺へ着す。明定院の法類なり。丁寧に奉事す。派出以來の馳走なりとみないふ。」

餘程御馳走があつたと思はれて微笑まれる

のである。その次に

「薬師秘佛一體あり。五分ばかり恵心の作か、縁起わからず。」

とある。この蓮台寺の檀家に私の極く懇意な人があるので、この文に書かれた薬師佛は今も秘藏されて居るかと思つて貰つたが、關東大震災後不明になつたとかで甚だ残念であつた。

「十七日、少し曇り。蓮台寺發足。八時頃より雨ふり出づ、つよからず。午後平郡多田莊船形村光勝山西行寺に着す。此寺は慧心僧都の開基にて西行法師の由緒ありといふ。——」

西行寺は宗務所調査課の島野主事のお寺である。今の本堂は震災後新築されたものであるが西行法師像と傳へる眞黒な木像がある。むかし西行法師が遍歴された時足を留められ

たと云ふ。

「今日開張の寺、

平郡金山村興禪寺行基作。

同郡青木村眞勝寺眞言宗海中出現と云。

此邊の寺々觀音の像數を見るに大かた名作なり。當西行寺にも小像あり。蓮台寺にも名像あり。……」

行誠上人は房州に入られると觀音様のあるお寺を盡く巡拜されて居る。明治十六年は癸未で、房州の觀音様は丑年とその間の七年毎に開張されるのが例であるから、上人の來られた十六年は恰もこの開張の年に當つてゐたのである。十七日のつゞきに

「四時、船形山觀音參詣、此寺大地なり、大福寺といふ。眞言宗。下より一百七十段ばかりのぼりて、大巖石おほひたるやうなるに御像より出づるなり、行基の作といふ。——」

この觀音は「巖の觀音」と俗稱されて名所の一つである。西行寺からも程近い。鏡ヶ浦を一望の中に收め、遠くは伊豆大島の噴煙が

望まれ、近くは沖の島、鷹の島手に取る如く頗る景勝の地である。

手にとりて見るばかりなるわきもこか鏡の島はなどくもるらん

なみの上にたかくぞみゆる鷹のしま我ききなれし名にもあるかな

房州に入られて第一番に詠ぜられたのが茲であるから、上人もこの風景には最も感ぜられたのであらう。曇つて居たので三原山の煙りが見えなかつたらしいのは残念であつた。

鷹の島は震災後隆起して陸つゞきとなり埋立てして今は館山海軍航空隊となつてゐる。戦間機爆撃機の煙音耳を聳し、機體の出入斷え間無き現時鏡ヶ浦を思へば實に今昔の感に堪へないのである。

「十八日、曉天。寺を出で、那古の觀音參詣。眞言宗にて大地なり。本堂は十間ばかり諸堂多し。本尊何れも多作也。云々。」
那古の觀音は國札第一番、房州最大の宏壯な觀音で今も賽者が賑つて居る。巖の觀音に劣らざる景勝の地で、鏡ヶ浦を一目に見下す

ことが出来る。裏の潮音臺と稱する山には和泉式部の墓がある。上人が參詣された時には諸堂多かつたのであるが、震災後尙復舊されず、今は本堂と多寶塔のみ聳えて居る。

この日、上人は金台寺（北條）にて中食、脱教の後北條村を経て大綱の大嚴院に入られた。當時の北條村は今はこの地方の中心地として賑ひ、殊に避暑地として海水浴に名高い。大綱は今、館野村の一部である。大嚴院は淨土宗として此地方の大寺で、靈巖上人開基の名地である。行誠上人は十八日から廿二日迄四日も茲に逗留された。

「廿一日。好天氣。晝前かきもの。」

浮陀羅久山觀自在大菩薩三十三ヶ所拜禮の言葉と申を冠におきて、三十三首の歌讀て結縁の爲めに奉る。四季、神祇、釋教、戀、雜、祝

として三十三首の歌を書かれて居る。浮陀羅久山觀自在菩薩とは前記の那古觀音のこととで、この文の冒頭に掲げた歌は即ちこの中の一首なのである。

さくら花匂ふ吉野の山ながら我御はとけに奉らなん

私はさきの「ふだらくの」の歌とこの歌とを三十三首中の白眉、而して亦上人歌集中の傑作と思つて居る。そこには悠々春の海の如き暖かさと大きさと確かさとを備へ、何の技巧もたくまずして御佛にまかせ切つた敬虔な上人のたましひが、實に遺憾なく現はれて居ると思ふからである。私はこの二首の歌を誦するとき、敬慕する上人にまのあたり接する心地がすると共に、また御佛の心に觸れるやうな氣がしてならない。

「廿二日、朝より小雨ふる。晝後大嚴寺發足、和尙世話人いとま乞。平郡海老敷村正林寺に着。田畠の間に驟雨あり。風もあり。」

此寺にて授戒式あり。小寺なり。普請よく出来、一切道具とも新調のよし。庭なども少し出来。山中にて不自由なり。」

海老敷村は今國府村に編入され、正林寺は

この文にある如き閑しい山の寺であつた。翌廿三日の日記に

「晴。朝看經。」

ゑひしきの里ぞ寂しき山畑の麥のほ末に月さしのぼる

と記されてある。この歌も實に好いと思ふ。静寂な山村の寺に月を眺めて居られる、鶴の如き老僧の面影が、南畫の如く彷彿と浮び出て來るのを覺える。この正林寺で善導大師、一千二百年忌の供養をせられた。

廿五日には本織村延命寺に詣でられた。本織は今、國府村に屬す。延命寺は曹洞宗の大寺で、里見家累代の菩提所として名高いが、現在は震災の爲め未だ充分舊時の偉觀を復さない。境内の十一面觀音は國札二十四番である。

この日の詩に

竹外斜陽赤。半窓松籟親。授書終一卷。不似客中人。

これも亦その歌の如く淡々たる中に味ひ深き上人の作風を良く現はして居ると思ふ。

「廿六日、曇。少さむし。大戸村大圓寺に至る。授戒あり。明教新誌一千五百三號明治十六年五月十八日の誌に『續日本高僧傳』作者大講義竺道契和尚の傳を出す、見るべし。美作愛染寺沙門照南撰は此人の弟子なり。——中略——右の人は早く故舜統上人より時聞したり。僧傳の篇述は是非なければならぬものゆゑ、己れもいろ／＼の傳記數十部を集め、兼て心がけたりしを、此人にして果して、此舉ありしを竊に讃美して、予が筆記ども少々なりとも贈りてんなど思てしかども、既にかく物にまぎれさることも得果さでありしぞいと残りおほき。願くば賛成して此十二卷なりとも上木させまほしうなんおぼゆ。今日此傳を讀で頗る懷舊にたへず。」

上人が熱烈なる護法の精神轉た感激に堪へない。高僧傳篇述に盡瘁せられたる其人は自ら高僧傳中の高僧であつた。この文に續いて二篇の詩があり、更に

「今夕植木氏にやどる。そは供入浴。この

宅地柏(まつばらん)多し。云々。」

とある。まつばらんは今日も尚この地方の山地に野生して居る。單純な植物であるが文人に愛玩されるにふさはしい。

「廿八日、晴、風つよし。入浴。朝物書き遣はす。十一時過寺に歸る。」

田 家

人入義皇以上班。地隣孤竹探薇山。
五風十雨固無怪。擊壤歌存田圃間。

堯圃舜田山下阿。老翁何事笑呵呵。
城中絲竹春如涌。未聽一聲擊壤歌。」

廿九日、大圓寺を發足、道中二里、途中、觀音菩薩開帳二ヶ所に參詣せられ、青柳村長泉寺(現在は館山町字青柳)に着。更に出野尾村小綱寺觀音に詣でられた。出野尾村は現在豊房村の一部になつて居る。この日の歌に

雨のふるに

旅ねするかやの軒はの雨の音はつねにきくよりさびしかりけり

「三十日、天氣よし。長泉寺を發足す。十時安房郡笠名村安樂寺着。蘇鐵多くある家を見たり。」

笠名は今、館山町の一部。この邊り南國的情景多く、大きな蘇鐵や霸王樹の繁るを見る。

「三十一日、晴。午前授戒、午後發足。館山三福寺着。二百人餘、紅白の旗立て迎に出づ。樓あり、よき寺なり。云々。」

三福寺も震災によつて荒廢し上人巡錫頃の盛觀は見られない。この文に見える樓も最早失はれて無い。然し住職の河本眞靜師は安房保育園を熱心に經營せられ、三福寺は社會事業の方面に名高くなつた。この保育園の創立者は、小野説愛師といふ若い熱烈な坊さんであつたが、病の爲め早く斃られたのは實に惜しかつた。

六月になつた。行誡上人は一日二日と三福寺で説教や法要をされたが、三日には磯村に向つて立たれた。

「三日、晴。八時過發足。送り百人ばかり

S.S.S.

國產代表基準品

サニエス・萬年筆

近代工場が完成した
精巧な萬年筆ですノ

ペンを酷使する

方々におすゝめ

します

¥ 2.00 以上各種

り。夕五時磯村森嚴寺前。寺の庭すぐに荒磯なり。」

送迎常に百人、二百人を數ふるを見ても、上人の徳望如何に高かりしかと窺はれるではないか。磯村は現在、鴨川の一部である。館山は波靜かな東京灣に臨んでゐるが、鴨川は太平洋の瀾狂ふ外房州である。この行程は十里近くあつて、道の半ばは荒磯に沿うて走る。森嚴寺は今、心嚴寺と書き、震災前は上人の文に見る如く、寺の庭が直ちに荒磯に臨む位

置にあつたが、今は山手の方に移轉して居る。磯村といふ名の如く寂しき海岸の村である。

「四日、石火堂觀音開帳に付拜禮。名號施し、鰯魚三百ひきばかり放生會。」

石火堂は今石見堂と書く。心嚴寺より海沿ひに歩むこと約二丁、國札十八番の觀音さまである。この邊、脚下の奇岩に太平洋の怒濤狂ひ、遠く小湊、勝浦の岬を望む壯觀を恣にする。

上人は三日から六日まで心嚴寺に滞在せられて、七日安房郡須賀村に引返し、秋山源兵衛氏宅に一泊された。八日、車で館山に歸り九日、二ヶ月に近く巡錫された房總の地を捨て、東京に向け出立された。汽船は十二時に館山を發し六時東京に着いた。「海上浪風しづかにして、いとおかし。」と記された九日を以て「房總日記」は終つて居るのである。

(要塞地帯のため寫眞は割愛した)

(をはり)

夏の美容

橋 本 樂 榮

夏の美容と申しましても別に大した化粧の方法があると言ふ譯ではありませんが、唯暑い眞夏の陽に照りつけられ、汗だく／＼にさせられ、而も街の埃をあびたりしては、どうしても弱い御婦人の皮膚を傷める事は必然ですからそれに對しての豫防の方法や手あてを簡単に申しませう。

夏はどうしても暑い陽に照らされ、日本の様な濕氣の多い暑さでは汗に苦しめられて、分泌が多くなり、その手入れが行き届かぬと染になつたりして一番汚なくなる季節です。そりした皮膚の分泌物、それによる染は早く手あてをするか豫防

をしなければ心の染と同じ様に仲直りにくいものです。

それは勿論大した方法がある譯ではなく、その直後普通に洗顔したり身を拭いたりしてクリームや其他純植物性の化粧水を用ひておく事です。

汗などの分泌物などに侵されると皮膚の抵抗力はなくなり、この残つた染がきたなく美容を損ずるものですから特に平素衛生して生地をいたためぬ事が大切です。

然し日光の直射や、汗にいためた場合は、みだりに分らぬ療養法を我流でやらずに、専門家に尋ねる事が肝要です。

婦人は朝中に仕事を終へて日中

の暑い時は成るべく静かにしてゐるべきです。

海水浴や登山に行つた場合は、特に美容に注意しないといけません。

若い人なら日やけや染みもすぐ癒りますが少し年を召した方は仲間なほりませんから純無鉛の植物性化粧水をつけて手入れすべきです。

登山の場合紫外線を注意し、クリームのみでなく、水氣の化粧水をつけ油類は用ひてはいけません。

特別の化粧法や治療法は専門家に任すべきですから、普通はたゞ良質無鉛植物性化粧水をふんだんにつける事です。刺激性の強いものや着色の白粉は決してつけぬ様にせねばなりません。

良質の石鹸で軽く洗ひオレフオ

イルなどつけておけばいいので

更には角地肌をいたためぬ様に平生の衛生に注意すべきで、化粧した後ろくに洗ひもせず又白粉をつける様な事は夏の禁物です。

又着色化粧品などの様に外國かぶれの化粧法などは日本人の體質を却つて傷めるものです。

ですからさつぱりしたものをを用ひ、個性をきづつけぬ様に自らを教養する事です。實際化粧の美は、化粧料ではなく、教養と信仰の人格的崇高美でなければなりませんから美は化粧の光よりも心の光に求めるべきです。

實際夏の皮膚病などは、衛生による豫防による他なく、それも婦人の教養によつて除かれ美もそこから生れるものと思ひます。

(筆者、本郷白山上美容大學院主)

現地
だより
友の戦死

淨土宗
從軍僧

中野隆雄

霜霧から南に下つた時だつた。

私達の討伐隊がトラック五臺にて或る小さい部落に入らうとした時だ。突然、本當に突然だつた、バラ／＼と三方から小銃の彈雨だ。私はトラックから飛び降ると二三の兵士とトラックの下にもぐりこみ様子を見た。前の二臺のトラックからは應戦の火ぶたは切られ、銃聲にまじつて機關銃の豆をいる様な音が起つた。

しばらく見て居る内に前方部落の家根上からと左右の土べいの中からくるのがわかつた。土べいには銃眼が澤山あいて居る。その一つ／＼から皇軍の上に彈雨を降らして居るのだが、然し五分間も経つと敵の銃聲は聞え

なくなつた。敵方の二臺の便乗兵は機銃を持つて前進を始めた。それから十分後にはこの小部落も皇軍討伐隊の手に歸した。此の時、私の隣に居つた通譯の野崎君は

「こんな時に一番犠牲が出るのだがねえ」と私にいはれた。然し今の戦闘には幸ひ一人も犠牲者は出なかつた。

野崎君は續けて

「君が昨年負傷した折口鎮西方高地の戦闘の時、第三大隊の池田通譯があゝの夜戦死したがやつぱり山の谷間で後方聯絡の途中三方から突然うたれて戦死したんだが、あの時の事を思ふとこんな出合頭の時が一番心配になるですよ。」



施與 (榮西)

或時、一人の貧乏人が建仁寺にやつて「私共夫婦子供は最早や數日の間、絶食して居ります。どうぞお慈悲を以てお救ひ下さい。」

榮西は何か物を與へようとしたが、折あしく房中には衣食も財物もなかつた。で彼は藥師の像の光の料に使ふべき銅棒を取つて打ち折り、束ねまるめて之を與へた。貧乏人は喜んで歸つたが、弟子達が承知しなかつた。佛の物を私するのは怪しからぬといふのである。榮西は答へて「まことに、その通りである。が佛は自身の身肉手足をさへ割いて衆生に施した。その佛の御心を思へば、現に餓死しようとする衆生には佛像の全體を與へてもよからう。自分はこの罪に依つて地獄に墮ちやうとも、この事を敢てするのだ。」

と池田君の時の事を思ひ出して、しんみりと私に話された。

池田君と野崎君は兄弟の様に仲がよかつたし、私ども事變勃發以來の戦友だつた。野崎君は池田君の戦死後は實兄に死別した様に悲しみ淋しがつて居た。天津駐屯中何時も池田君の家を訪問しては一人の母親に「池田君は一生の間御奉公に上つたのだから僕が池田君の代りにお母さんを見てあげますよ」

とやさしく慰め、池田君の佛前に行つては「君は幸福だよ。亡くなつた後でもこうしてお母さんに回向してもらへるが、僕は戦死でもしたら誰も見えて呉れる人がないんだからなア」

と生ける人に言ふが如く、盃に自分で酒保から買つて來た酒を注いで佛前にそなへ、そして自分も呑んで終には「何時もの様に一緒に寝よう」といつてはその儘そこにごろりと寝るのだつた。池田君のお母さんは何時もの事ながら其のやさしい友情に泣かされてゐ

た。私もよく一緒に参りしては泣かされたのだつた。

丁度討伐に出て二日目だつた。次の部落に進んで其入口の一軒に野崎君は兵士一名もつれず唯一人、それも部隊長の止めるのもふり切つて「私も日本男子です。一人で大丈夫ですよ。」と元氣よく行つたのだつた。敵寇の戦場でも、折口鎮でも彈丸の飛來する下で流行歌を唱つて居た野崎君だから、それくらゐの事は朝めし前だつたらう。然し野崎君が一軒から農夫らしい住民を引きだして色々部落の内狀を聞いてる時だつた。五十米ばかり前の家の屋根の上から一發、パアンと音がしたと思つた時、住民と話して居た野崎君が一言も云はず屋根の方を指さしつゝバツタリと倒れた。

後方から狀況を見つゝ待機して居た、私共一隊は一せいに射撃し、もう、いや應なしに部落内に突撃し出した。私は野崎君の所へ馳けよつて、抱き起したが、苦しき顔もせず言切れて居た。たつた一發で死んだ。胸を

また或る時、貧乏な建仁寺では、寺中絶食せねばならない事があつた。その時一人の檀那が榮西を請じて絹一疋を施した。榮西は喜びの餘り、人にも持たしめず、自ら懷中して寺に歸り、知事に與へて云つた。

「さアこれが、明日の朝の粥だ。」

ところへ或る俗人の所から「困る事が出來た。ついては絹が少し頂きたい。」と頼んで來た。榮西は先刻の絹を取返して、それを與へ不思議がる弟子達に云つた。

「各々は變な事をすると思ふであらうが、吾々僧侶は佛道を志して集つてゐるのだ。一日絶食して餓死したところで苦しい筈はない。それよりも世間的に生きてゐる人間の苦しみを助けてやる方がよい。」弟子みな感じ入つたといふ。

私生子(白隠)

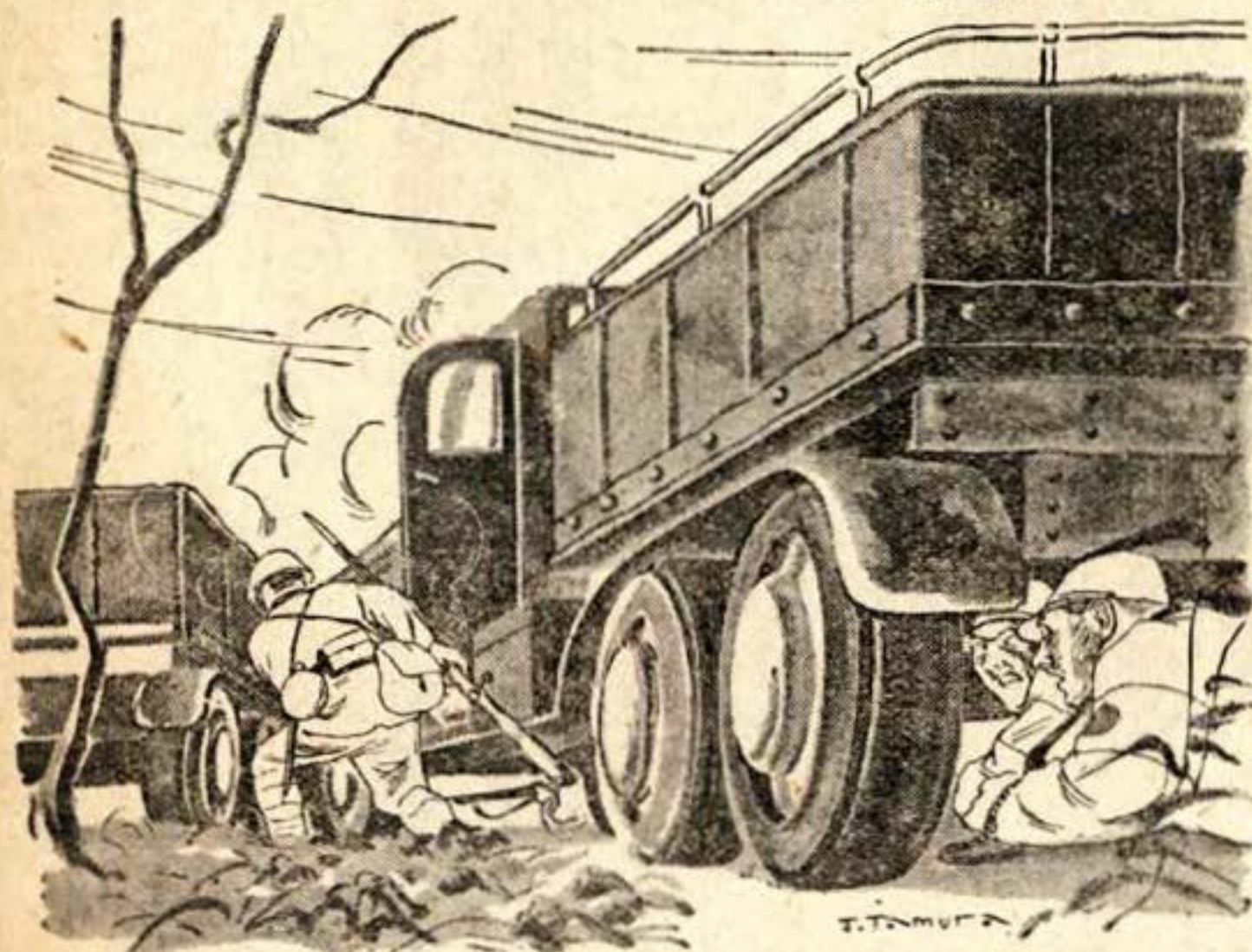
原野の商家の主人某は平生深く白隠の高徳に歸依してゐたが、その娘がいつの間にか不義の胤を宿して月満ちて一子をあげた。而も意外にもそれは白隠の子だと云

射たれて居る。遠く近く銃聲はパン／＼と聞える。私は運轉手と死體を自動車に乗せたが、なんだか夢の樣だ。

部隊長は部落を全部焼き捨てる様命じた後、掃討を開始した、敵は數十の死體を遺棄して退却した。

「野崎通譯、君の仇は討つたぞー」と部隊長は自分の外套を靜かに野崎君に掛けられて合掌せられて居る。私は聲かぎり大きな聲で念佛を唱へた。

その夜北支廣野の月下に野崎君の死體は火葬せられ、靜かな月下に多くの兵士達に守ら



れつゝ、紫色の炎は高く／＼中空に向つて上つて居る。何處かで支那犬の遠吠が聞えた。

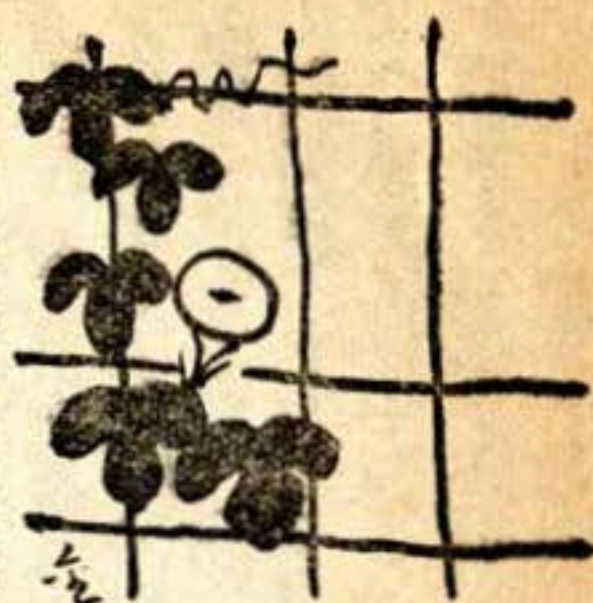
私はたつた一人の野崎君の爲めに部隊中の各隊附通譯に話して皆なで野崎君をとむらつてやる事にした。天津に歸つた時盛大な追悼會が催され部隊長始め皆な將校も兵士も參拜された。式がすんで私は位牌を部隊の通譯室に安置した。今、野崎君は、毎日々々兄の様な皆に拜まれて居る。それも池田君に對する野崎君の様に配給品があれば位牌の前には必ず一人分置かれるのだつた。

ふ。主人は不届な破戒坊主め、かうしてくれると、孩兒を白隠の許へ届けて惡體をついた、その評判は忽ち近隣に傳はつたが、白隠は平氣なもので、毎日その子供を抱へて乳を貰ひに歩いたりなどした。或日久しぶり、例の主人が氣まりの惡さうな顔をしてやつて來ると、いきなり白隠の膝下にひれ伏して、

「申譯ございません。娘の云分を信じてとんだ濡衣をお被せしました。今日娘は何もかも白狀致しました。その子は宅の番頭めの子でございます。私が和尚に歸依してゐたのを知つて一時遁れに嘘を申したのでございました。」

と旬はん許りであつた。流石の娘も雨の日も風の日も我子の如く辛苦養育してゐる和尚を見て良心の苛責に堪へなかつたのである。白隠はにつこりして「さうぢやつたか、この子にも父親はあつたのか。」

と格別それを咎め立てもしなかつた。某の信仰は前にも増したといふ。



武道を語つた女性

山 田 靈 林

明治の顯官の中に、鳥尾得庵といふ將軍があつた、大西郷や山岡鐵舟居士と親交があり、何れも輒に深い遺詣をもつ人々であつたがために、互に相許すところが、おのづから特に深かつたやうである。

ある日、鐵舟居士のところから、得庵將軍の邸へ使が來た、中年の婦人であつた。客間に通して婦人が差し出した手紙を見ると「此の女性、一方むきの擔板漢なり、よろしく提撫を請ふ」と書いてあつた。一方むきの擔板漢とは融通のきかない、意地つ張りを云ふ。將軍は手紙を読み終ると、客間から居ながらに見られる郊外の風趣を眺めながら「あんたは千手觀音の像を見たことがあるか」といつた。見た事があるといへば、次に將軍が何をいふか、分らぬ婦人ではなかつた。婦人は機先を制し「あんなに澤山の手をつけて、一たい何にしようといふのでせうか」といつた。いつもの將軍であれば「バカア」と大喝するところである。然るにこ

のときは、それをなさず、却て語をすらやはらげて「人生にはあの手この手といろ／＼要るからさ」といつた。

人生にはあの手この手が要るといふ、これがこの婦人には堪へられぬ不快であつた。萬里一條鐵、生一本でいかねば承知がならぬのである。將軍は早くもそれを見て取つて、成る程これは一方むきの擔板漢だと思つた。これは將軍が既に軍職を退いて、海外視察を終へ、専ら國民精神の作興運動に邁進してゐた四十三歳（明治二十一年）の夏初めのことであつた。

將軍は庭の巨きな松の樹をゆびさしながらいつた、「あの松の中間に變り葉が群つてゐる、一つも上に向いた葉がなくて、横や下にばかり向いてゐる。見えたらう、こつちから二本目の松の樹の中枝のところだ」といつた。婦人はそれを見た、將軍は猶も言葉をつゞけさうな氣はひがあるので、婦人は目を放たず見てゐると、將軍はいつた「一つところを見つめてゐると他の枝の葉が見

えぬ、一つところに心を奪られて、他が見えぬ。今は相手が松の葉だからいゝが、強敵だつたらどうか、電光一閃、さつと眼の前に突き出された槍のほさきに、心を奪られてしまつたらどうなるか」

將軍は口をつむつたが、黙つてゐる婦人をうながすやうに、「あんたは武士の家にゐる人だ、武道のたしなみはあるであらう。槍を突き出されたらどうする、心をどこに置くか」。婦人は語り出した、それは澤庵禪師が柳生但馬守に示した不動智神妙録にいふところのものであつた、殆どその文をまる暗記して讀みたてゝゐる様に將軍には感じられた。不動智神妙録の文には――

心を何處に置からず。

敵の身の働きに心を置けば、敵の身の働きに心を取らるゝなり。

敵の太刀に、心を置けば、敵の太刀に、心を取らるゝなり。

敵を切らんと思ふところに、心を置けば、敵を切らんと思ふところに、心を取らるゝなり。

我が太刀に心を置けば、我が太刀に、心を取らるゝなり。

我れ切らじと思ふところに、心を置けば切らじと思ふところに、心を取らるゝなり。

人の構へに、心を置けば、人の構へに、心を取らるゝなり。

或人問ふ（某が澤庵禪師にその所見を述べていへる也）我が心を、とかく餘所にやれば心の行くところに、心を取り止めて、

敵に負くるほどに、我が心を、臍の下に押し込めて、餘所にやらすして、敵の働により轉化せよと。

（以下澤庵禪師の所見なり）もつとも、さもあるべき事なり。

然れども佛法の向上の段より見れば、臍の下に押し込めて、餘所にやらぬといふは、段が卑し、向上にあらず。（中略）

臍の下に押し込んで、餘所にやるまいとすれば、やるまいと思ふ心に、心を取られて先きの用がけ、殊の外不自由になるなり。

或人問うて云ふは、（更にまた某が澤庵禪師に見所を述べていふ也）心を臍の下に押し込んで働かぬも、不自由にして用が缺けば、我が身の内にして、何處にか心を置くべきぞや。（中略）

我れ（澤庵禪師）答へて曰く、

何處にも置かねば、我が身一ぱいに行きわたりて、全體に延び

ひろがりてある程に、手の入る時は、手の用を叶へ、足の入る時は、足の用を叶へ、目の入る時は、目の用を叶へ、その入る

ところへに行きわたりてある程に、その入るところへ用を叶ふなり。

萬一もし一所に定んで、心を置くならば、一所に取られて、用を缺くべきなり。思案すれば、思案に取らるゝ程に、思案も分別をも残さず、心をば總身に捨て置き、所々に止めずして、そ

のところへにあつて、用をば外さず叶ふべし。（中略）

心を匿ぎ、猫のやうにして、餘所にやるまいとて、我が身に引

き止めて置けば、我が身に、心を取らるゝなり。身の内に捨て置けば、餘所へは行かぬものなり。唯一つ所に止めぬ工夫、これ皆修行なり。

婦人はながくと、武道の心構を説き立てた、その言ふところに、一點の間違ひもなかつた。しかしながら婦人の起居動作はいへば、少しも武道のそれに成つてゐない。松の樹の群葉といはれ、心は群葉に取られてしまふ。突き出された槍といへば、槍に心が取られてしまふ。心をあつちへこつちへと引きまはされる、引きまはされるがために、心が疲れる、痙攣する、硬化する、眞劍勝負であつたら、婦人は夙にその息の根を止められてゐたであらう。

婦人が饒舌に述べたてゐるのを將軍は黙々として聞いてゐた。將軍は心ひそかに、子弟育成の方式一變の弊こゝに至るか、涙を呑んでゐたであらう。將軍の信念からいへば、人を作るの道は、言葉にあるのではなく、心にある、いや心にあるのではなく、身にあるのである。昔の婦人には武道の心構へを述べることこの婦人の如き人はなかつた、しかしながら武道の心構へによつて、その起居動作をなした婦人は少くない。將軍はそれを思うて嘆いた、そして婦人に語り出した。

わしが大阪鎮臺にゐたところである、時々京都へも出て、禪宗の寺で、雲水坊さんと一緒に坐禪をした。禪寺にはいろ／＼感

心することがあつた。いつも思ひ出して今でも自分を鞭つことがある。中でも特に感心してゐるのは朝起きの起きふりである。私はこの年になつても、朝の床の中で、早く起きてと思ひながら、起き得ないでぐ／＼してゐることがある。しかるに禪寺の修行者は、目の覺めたときは、もう起き上つてゐる。

そんなこと位と思へるかも知れないか、起きるときに、さつと起き上る、寝るときに、すうつと寝るといふことは、容易のことでない。禪家には、鐘鳴れば法堂、梆響けば齋堂、といふ語がある。講堂で講話が始る知らせが鳴ると、すうつと起き上つてゆく、食堂で御飯だといふ合圖があると、さアツと出向く、而もそれが一人や二人でない、百人ゐても二百人ゐても、一齊にそれが出来る、時間からいつても、一人で行動してゐる程の時間しか要らぬ、實に偉いものだ。

起居動作が斯くの如く、凝滞なく、さあつ／＼と出来るのは、心を何處にも置いてゐないからである。どこにも繋ぎ止めてゐないから、自由自在の働きが出来る。心は何處に繋ぎ止めても、自由がきかぬ、況んや心に痙攣を起したり、硬化させたりしたのでは始末におへぬ。禪家ではさういふ輩のことを一方むきの擔板漢といふ。心を凝滞せしめてはいかぬ。善いことにでも悪いことにでも、心が凝滞したら、人間本來ののび／＼とした生活が失はれてしまふ。

——將軍は諄々として説いた、そして私は坐禪をする時が来た、あんたもやつていくがい、といつて、客間の壁に面して婦人を坐らせた。鳥尾將軍は何故その婦人を坐らせたか、坐ることが、その人をしてのびくとした生活に入らしめる最も簡易直截の正道であるからである。あらゆることに、心が凝滞せず、自由自在に健かなる働きをなし得る道であるからである。將軍は坐禪をして念佛を唱へた、人にも勧めてそれをなさしめた。

その當時、天下に國民精神作興の運動が澎湃として起つた、運動の方法はいろいろあつた、そしてその多くは文書により講演によつて、人々の認識を深めるといふのであつたが、將軍のそれは、人々に認識を深めしめるに止まらず、それを「體識」にまで深め

しめるものであつた。それがためには、どうしても坐禪して念佛を唱へることが必要であつたのである。

體識とは體が承知することである。認識とは頭が承知することである。頭が承知したことを實行しようとするのには、なか／＼の手續がかかる。實行しようか、すまいかと、頭の中の議が容易にまとまらぬ。いよくまとまつても、體がうまく起ち上るかどうかわからぬ。しかるに頭でなく、體がいきなり承知するといふ謂はゆる體識の場合に於いては、實行は極めて容易である。實行の快い進展を通し頭がそれを納得するといつた工合である。將軍はこれをよく承知してゐる。將軍にいはすれば深い體識のないところには、人生はないのである。

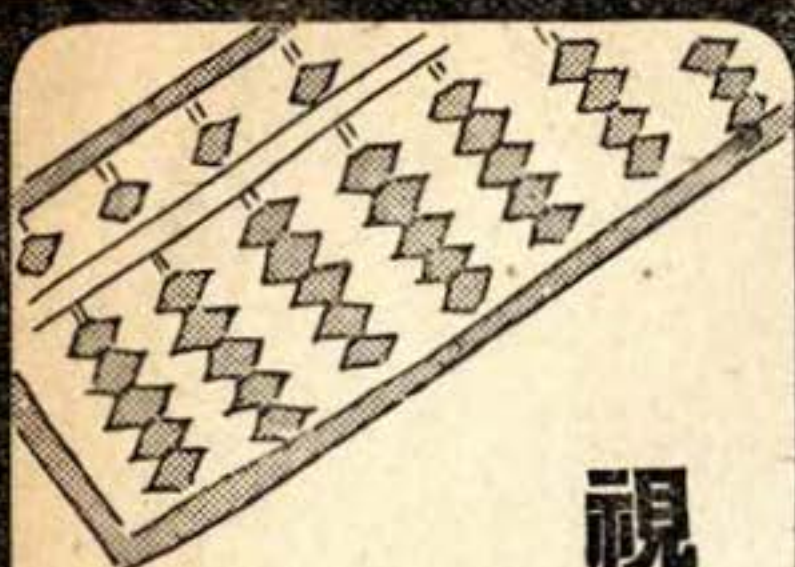
視力經濟學

消費のある處、供給がなくてはならぬ。需要と供給のバランスを保つ處に、經濟の根底がある。處で物資の供給は圓滑に行つてゐる今日でも、體力の供給は果して完全だらうか、否、むしろ消費一點張りで、充分の供給が行はれて

ゐない事實がある。その最も顯著な一例が視力の問題である。讀書だ、執務だ、創作だ、シネマだ、觀劇だと吾々は朝から夜中まで視力の濫費をやつてゐるが、眼に休養と手當を與へることは忘れ過ぎてゐる。結果は近視眼の價出であり、眼疾の流行となつて現はれてゐる。

視力を經濟的に消費することは健康への第一條件である。眼が疲れたら、充血を起したら、眼炎に犯されぬ裡に早速眼科藥スマイルを點眼する位の常識は何人にも要求したい處だ。其處に能率の躍進と生活の明朗性が生れる。

因に眼科藥スマイルの定價は二十五錢・四十五錢で全國藥店百貨店藥品部に販賣



寒山頂上月輪孤なり

吉水靈家

彼には詳びらかな戸籍さへない。現代人の常識をはるかに越えた、人生の深き価値の世界に安住しつゝ、丸裸の一生を終つた事だけが傳へられてゐる。

其の名を寒山と云ふ。

獨り重巖の下に臥す。蒸雲晝消えず。

室中暗暖たりと雖も、心裡喧囂を絶す。

夢に去て金闕に遊び、魂は歸りて石橋を渡る。抛除せん我れを閑する者。歴々たる樹間の颯。

支那大陸に絢爛たる文化を示した大唐の代、天台重興縣の西方七十里の、とある巖窟に起き臥して、世の人々からは貧士と狂風よと嘲けり笑はれながら、破れ衣に木履を踏み鳴らして、重巖の幽林に住まふ彼

は、眞生命の線に觸れた歌を誦み續けて其の一生を過した。

安身の處を得んと欲せば、寒山長く保つべし。微風幽松を吹く。近く聴けば奇愈

よ好し。下に斑白の人あり。喃喃として

黄老を讀む。十年歸ること得ざれば、來

時の道を忘却す。

峨々たる白雲の高きところ、彼が林間の

住ひは既に常人を逸脱して、一人飄々と

黄老をけみして日月を送つてゐたものらしい。時には靜居の扉を立てて野に牛童と

遊び、寒山の獨居は人生の眞實道を歩む

天下唯一の道場であつた。

それにも増して彼の喜びの一つは、心の友、天台國清寺の食堂を司る拾得和尚

との交りであつたらしい。みすばらしい彼の姿が、國清寺の長廊に見えると、高らかな高笑放歌で寺衆を驚かせながら、宇宙の眞理を拾得と共に語り歩ゆむで彼の全骨頂を示してゐた。風貌こそは決して美しくかつたと思はれぬ。やせおとろへた貧乏の彼に拾得は常に殘菜を與へる事を忘れたかつた。

寒山を同じく侶と爲す。松風水月の間、何事ぞ最も閑適なる。唯だ逝去の人有り。悠々たり三界の主。

心の友寒山を得た拾得も又、共に語る友を得て友情の限りを盡してゐたらしい。

かつて台州の刺史である閻丘胤は、丹丘に知事として赴任のみぎり、病を發して重

く、如何なる醫藥にも施す術がなかつた。

此の時、國清寺より通路の旅にあつた豐干

が行き過ぎ、彼は淨水を含んで閻丘胤に噴

くと病ひはたちまちに失せてしまった。

閻丘胤は深くこれを多となし、自からの

師となるべきを乞うたが、彼れは寒山と拾

得の名を擧げて去つた。

其の後岡丘胤は台州の刺史となつて赴くや、豊干の言葉を想起して豊干の言をただし、縣界七十里の奥地より國清寺を訪なふ人寒山あるを聞き、勇みてこれを禮せんものと國清寺に向つた。

此の時既に豊干は此の世になく、寺僧道翹の導びきに依つて屋内に進んだ。厨に入ると竈の前に火に向つた二人の奇人が、高らかな談笑を續けてゐた。即ち寒山と捨得なのであらう。岡丘胤驚ろいて彼等を敬して禮拜した。二人は此の時聲をそろへて岡丘胤を一喝して言つた。

「豊干のお饒べり野郎、俺達を禮拜して何になるか」

卒然として寒巖にもどり、卷に滿つる才子の詩。壺に溢る聖人の酒。行いては牛轡を愛觀し、坐しては左右を離れず。霜露茅簷に入る。月華甕牖に明かなり。此時兩甕に吸うて、詩を吟ずること三兩首。

聖人の酒に陶然と酔ひしれながら、行雲流水の生活にひたり、靜かに天然の人となつて世の生を享しんでた。

岡丘胤は何とかして二人を國清寺へ住せしめんものと、使を遣つて二對の淨衣に香藥を添へ供養したが、遂ひに來らず、使者は使命を全うせんと寒巖に攀ちて寒山に會つた。

寒山は使者を見てとると、「賊々」と大聲しつゝ穴中深く消えてしまつた。

岡丘胤は深くこれををしみ、道翹をして寒巖の竹や木や石や壁間に描かれた詩を蒐め、豊干をも加へて三陰詩集となした。

野聖の途は常に淋しい。寒林岡木の間に隱栖しつゝ、峰吹く風の音に、谿ゆく水の聲に、彼れは魂の聲を聞いて生活してゐた。

彼からは紅顏の若者も、美貌の處女の艶やかさもくみ取る事は出來ぬ世路の辛苦に瘦せおとろへた踰跢たる姿が眞劍になつ

てせまつて來るだけである。花に笑ひ、鳥に泣く寒山の獨居に、晝は聖賢の書に親しみ、巖窟を出でゝは猿の近々しい聲を聞いて果を探り薪を集めるだけであつた。そして夜は又靜かに岩上に座し、靜かに冥想に耽る悠久の姿を例へば遊行僧一遍が大往生のみぎり、「一代の聖經みなうせて、南無阿彌陀佛となりけり」と歌ふ心境にも似てゐる。

圓かな愛、輝ける眞智の面影、蒼穹の燦爛たる星屑に、彼は人生の愛を、智慧を、救ひを信ずる人であつた。其の姿は餘りにも淋しい。寒山の愚は我々に聖なる愚さを教へて呉れる。彼は歌ひ續くるのであつた。

寒山頂上月輪孤なり。晴空を照見するに一物も無し。貴ぶべし天然無價の宅。埋んで五陰に在つて身軀に溺る。

x

x

x

x



義 俠 奴

小 島 健 三

下 郎 の 信 心

松平越後守の御留守役に、堀三郎左衛門といふ器量人がをりました。御留守役といふのは、いまでいふ外交官に相當する役で、非常にはで、羽振りを利かしたものです。

この堀三郎左衛門といふ御留守役は、いたつて地味な方で、他藩の御留守役のやうに、交際に莫大もない金を費ふやうなことはしなかつた代りに、家來道樂でした。

この堀三郎左衛門の下郎に蘆田勘助といふ大力無双のものがをりました。身の丈七尺ちかくもあり、のつし／＼と歩くさまは、小山が動きたしたかと思はれるほどの大男です。

ところが、この蘆田勘助、下郎に似合はず、いたつて氣立てのやさしい、信仰のあつい男でした。かうした大力無双の巨漢で、なかまといつては、みな下郎ばかりなのに、暇があると、いつも近くの神社佛閣におまゐりをするを愉しみにしてゐる變りものです。

「勘助の奴、どうして交際のわるい野郎なんだ。一どだつて俺たちの遊びに入らないぢやないか？」

「またお寺まゐりか？」

「この若ぞうに、爺くさいお寺まゐりなんぞしやアがつて、なんて嫌な野郎なんだ」

勘助は、下郎なかまから爪弾きものにされました。ところが、友だちから何んと悪口を

云はれ、罵られても、勘助は、平氣でお寺ま
ありをつゞけてゐます。

時は、延寶五年、蘆田勘助二十七歳の夏で
す。二十七と云へば血氣ざかり、お寺まゐり
など馬鹿々々しいはずなのに、休暇ともなれ
ば、判で押したやうに山門をくぐるのでした。

勘助の手柄

松平越後守の嚴かな、そして、はでやかな
行列が、しゆくくとつゞきました。松平家
のほまれの名槍をなかに、大手の城門をでて
來ました。

「下に——下に——」

先拂ひの聲が、威嚴をひく。足輕の一隊に
つゞいて、つぎは徒士です。つぎは、侍二
十四人を前とうしろにして、越後守が馬をす
めてゐました。そのあとを、おさへてまた
徒士。足輕。「下に——下に——」

——と、どうしたのでせう。

ぐらくツと先拂ひがゆらいだと思ふと、

「あ、あぶないッ——」

急激なさけびが、この美々しい行列を、た
たきつけました。

いまでも、狂亂した奔馬が、行列のまつた
だなかに暴れこんだのです。さつ——と行列
は水をわつたやうに四散しました。咄嗟にな
ると人間といふものは、自分の身をかばふも
のと見えます。主君松平越後守
を、そのまゝにして、足輕も、
徒士も、わあつ——といふ聲と
もに逃げました。

奔馬は、これをいゝことにし
て、砂塵をあげて荒れだしまし
た。その時です。重臣、堀三郎
左衛門のそばにおともをしてゐ
た、蘆田勘助、土煙をあげて素
飛んでくる驛馬のまへに兩手を
ひろげて、仁王だちになりました。

もう十間と、そのまゝにして
おいたら、越後守の馬をひつか
けて、どんな怪我をさせるかし

れません。危機一髪のところでは

「あぶないッ——」

一同は、棒だちになつて、色を失ひ聲をの
みしました。

しかし、山のやうな勘助が、ぐツ——とさし
だした松のやうな腕が、奔馬の轡を見事につ



かみました。と、同時に、馬は二三ど、ダ、ダ、と大地を蹴つて、跳ねあがりました。が、おさへられた勘助の力を、振りきることができません。そのまゝ、猫のやうに首をたれて、黙りこんでしまひました。

一同は、ほつーと安堵の胸をなでおろしました。なんといふ勇敢な勘助であらう。主君の馬前に、身をもつて櫓となつたのです。

あたらし名槍

勘助は、松平家重代の名槍で、櫓の長さ四尺三寸、握り太の九尺柄目方十貫以上もある槍持に拔擢されました。槍持は下郎ときまつてゐたものですが、勘助ばかりは士分に取たてられたのです。

この名槍は、徳川譜代の臣に、本多豊後守康家といふ剛のものがをりました。元龜元年、姉川の初陣から、同三年の三方ヶ原または鷹の巣、小牧山などの合戦に、この槍で大功をあらはし、同九年高天神の戦にまた功名をたてたので、康家自慢の槍でしたが、年をと

ると、どうにもこの十貫以上の槍をいかに大力の康家もあつかひかねて、主君秀康公に獻じた、なか／＼武功をたてた名槍です。

奔馬をとりおさへた大力といひ、巨魁といひ實に立派なものと越後守に見だされて、勘助は、一躍この名槍を持つことになりました。

勘助は、五十人力といはれてゐます。それに血氣ざかり、十貫くらゐの槍は、おがらのやうにも思つてゐません。

参勤交代の威風堂々たる松平越後守の行列のなかに、勘助の雄々しい姿は、一段と光を放つて見えます。

「下に——下に——」

街道をゆく大名行列のなかに、小山のやうな勘助の威容は、松平の行列を引きたてゝあまりありました。

延寶五年の秋から、かうして名槍は勘助の持つものときまつたのです。延寶も八年で元和元年になり、三年で貞享と改まり、やがて元祿と年號がかはりました。

その間、勘助は、ずうーと名槍を持ちつゝけて來ました。勘助ほど、この名槍を持ちつづけたものはをりません。名譽あるこの槍持の役になつて、参勤交代を一どやると、たいい槍持が逃げてしまつたのです。

それは、無理ありません。十幾貫といふ一丈三尺三寸の槍をもつて行列をくづさず持ち歩くのですから、なみたいていのものには持てるはずはありません。

長くて二往復、早いになると、名槍をもつたゞけで、眼をむいて夜逃げをしたのです。名譽ではあるが、いかにも難儀な力業です。それを、勘助は、二十四年の間もちつづけました。

ところが、勘助も、いつまで若くはありません。彼は、頭を雪をいたゞく五十の坂をこしてゐました。氣は若くとも、年は争ふことが出来なく、そのうへ、痔病が昂じて歩行も思ふやうではありません。

「蘆田氏、來年のお國入りには、どうなさる？」

「うむ……」

勘助は、石のやうに黙り込んでしまひました。勘助は、やがて、呻くやうに、

「痔病さへなければのう——」

哀願するやうな眼を天井にあげて嘆息するのでした。しかし、それは勘助の負け惜しみです。かりに痔病がなくなとも、寄る年波です。昔のやうに十幾貫一丈三尺三寸の長槍をもつて、數十里のおともは意地にも出来なくなつてゐました。

「昔は、この名槍が戦場の役に立つたであらうが、今日のやうな太平無事な時代には、却つて無用の長物である。かりに俺の手からはなれたものにしては、ざつに槍持になつたものが、自分と同じやうな苦汁をなめるにきまつてゐる」

勘助は、そのことのみを思ひつゞけました。

そして、翌年は、元祿十四年です。いよいよ、参勤交代の時が來ました。

彼は、決心をして、九尺柄の槍を六尺のと

ところで、惜しげもなく切おとしたのです。切るまでは、苦しみました。主君松平家重代の寶物です。それを、無斷で切るのですから、



その罪は、勘助充分に覺悟のうへです。

「これなら、俺でのもうても、容易に持てるわ」

彼は、それを持ちあげて、子供のやうに悦

びました。勘助は、ある坊さんの説教から、驟然と義侠の心に目ざめたのです。自分の身をすてゝ、後々の槍持のために、鑑から三尺

ばかり切はなして槍を軽くしたのです。

やがて、この事が主君の耳に入り、逆鱗にふれて、切腹を申しつけられました。しかし、勘助には、少しの悔いも見いだされませんでした。検視の役人が來て、

「何か云ひ遺すことはないか？」

「痔の病の人が、俺の墓に参詣すれば、きつと癒して進ぜよう」

勘助は、眼をつむつたまゝ、自信ありげに云ひました。そして立派に切腹をして果てました。時は、元祿十四年九月三日、勘助五十二歳でした

奴地蔵が勘助の死後、芝の青松寺に建てられました。背面に——臣名義相淨眞

信士、俗名蔵田勘助義勝——と刻んであります。この地蔵様がふしぎに痔病にご利益があるといふのでおまゐりする人が絶えません。



(後)著者と(前)吉田二郎

薩摩路の純情詩人

小橋 麟 瑞

儼然多き人生をひたぶるに亡き妻のありし日を偲ぶ追憶と、より高き思念を凝らす求道の精進とを兩輪とする吉田絃二郎先生の獨り歩む純情の行脚は總てをなげすて、けうしも薩摩路の梅雨の霽れ間を縫ふが如くに展べられて行つた。

十八日一路恙なく迎られた鹿兒島驛頭の朝は薄曇りながら雨の憂ひは無きかに見えた。歩廊に迎へる人も迎へられる人も吉田先生を知ると否とに係らず一様に澄み切つた心の雰圍氣の中に血色よく元氣な先生のあの柔らかな感じを受け取つたことであらう。

午後三時から二十分、H G から『旅人とし

ての感想』を放送して人の世の美しく温かい心に觸れてゆく感激を、法然上人が『遊蓮房に逢つたことだけでも此世に生れた甲斐があつた』と喜ばれた話などを引例しながら聴者に深い感銘と示唆を與へられた。

其夜徳富蘇峯先生の「薩南第一樓」と筆太に扁額の光る磯の風景樓に招かれた十四五名にの方々の末席に交はり此春玉川瀬田町の先生のお邸を訪れて以來丁度百日あまり再び先生の醫咳に接することは言ひ知れぬ嬉しいことであつた。『鹿兒島に来ていつも妻と話しの切り出しは必ず櫻島でした。いつ見てもい、ですネ』先生の想出は次々に在りし日の繪巻

物として繰りひろげられて盡きないのであらう。移らふ鳥影が夢のやうに海の香を添へて次第に夕暗に吸はれてゆくと遙かに街の灯影だけがクツキリと點綴する。謙虚そのもののやうな物腰で話して行かれる先生の周圍には別な世界が生れて行く、ほんとに和やかに嬉しい情景であつた。

因縁といへば大正と昭和の相異こそあれ同じ十二年の七月一日が私の母の日であり明枝女史の逝かれた日であるのも不思議だが、更に去る四月吹上の句碑を伊作町に講演の序を以て訪ふたのも十九日、吉田先生から除幕式日取が決定したとのお手紙を頂いたのも十九

日、そして今回の除幕式も十九日と連日三たび十九日と續いたことも不思議といへば不思議である。

昭和十三年六月十九日！それは吉田先生にとつても私共にとつても忘れぬ待望の日であり、印象の日であり、想出の日となるべきであらう吹上濱の句碑除幕式の行はれる日なのである。その朝は非常に明るかつた。人は顔の合ふ毎にけふの恵まれた天候を讚美する言葉が交されてゐた。吹上の句碑除幕式に参列する人達は發車點の鹿兒島驛から乗る人、次の西鹿兒驛から乗る人、乗替の伊集院驛から参加する人、様々であつたが南薩鐵道は平素三等客に解放してゐる二等車に貸切の札を掛けて特に一行の便宜を圖つて呉れたに心遣りは乗りきれぬかどうかを氣遣つた人達とつて嬉しいものであつた。伊集院驛まで出迎への伊作高女校長笠井さん、伊作助役坂本さん學務主任の濱田さんらも加はり車中はしきり雑談の花が咲いたが、吉田先生の眞摯な氣持で話される聲がきこえて來ると車中は

期せずして耳を傾ける時間が續いたりした。窓外の松林が見えてると此の車中に明枝女史の姿のないことが今どんなに吉田先生の感懷を淋しくしてゐることだらう。そうした淋しみには間もなく先生の眼底に映るあの句碑へと次々に近づいて行く松並木の一本一本が一つの計量器のやうにも思はれるであらうと靜かに付度しつゞける私であつた。伊作驛の一つ手前まで出迎へた町長の川越さんの巨軀が車内に運ばれるともう満員になつた車内がまた一しきり感懷の動搖を繰返した。

伊作驛を降りて出迎の町役場の人達や有志の人達と一緒に法然上人鑽仰會鹿兒島支部の會員、婦人公論のグループ、それに新聞記者團の一行と仲々賑やかだ。一行は準備された數臺のハイヤーにギシ／＼詰め込んで都合では屋根？の上までと思はれる程にしてそれでも丁度全部を吸ひ込んだ車は霧れ間の續く梅雨の空を仰ぎながら改修中の橋詰まで飛んだ。それから先を四五町徒歩ふと句碑のある入來濱の入口には入來小學校の兒童の一團と

町の有志並に婦人團體が堵列して出迎へてゐた。私は地方人の一段と深い純情さをこの光景の中に見ることができた。感激にうるむ純情詩人吉田先生のうしろに續く一行も同じ感激のコースを辿つて一つになつたであらう。

式は定刻にやゝ遅れて十時四十五分に開始された。二人の神官によつて嚴かに式は進められ、奥田圖書館長の令嬢淳子さんと入來小學校長關氏令嬢美和子さんと二人の手に綱は引かれた。幕がすべるとそこに水くきの跡も美しく『初秋や夢よりあはきものかたり 明枝女』の字がくつきりと浮んで出た。嵐のやうな感激の拍手は吹上濱の松林にこだまして今しがた式場の近くに啼いたホトトギスや三光鳥を驚かしたことであらう。斯くて川越町長の式辭、來賓の祝辭、祝歌、祝句、東京からは鑽仰會東慈道氏、大東出版社小笠原鳳瑞氏等から寄せられた祝電披露等があつた。續いて吉田絃二郎先生は在りし日の追憶とけふ待望の除幕式に参列の感懷を籠めた謝辭を述べられたが思ひ内に餘つて言葉外に出でずの

風情に加へて最後に

「故人にこの出来上つた立派な句碑を一目見せてやりたかつた」

の一語に至つてなみ居る會衆は誰一人涙を催はさぬはなかつた。靜かに感激にひたる女性の群からは歎歎の聲さへ傳はつて來たのであつた。

式果て、吉田先生の記念植樹があり優しい姫小松は句碑の前に一段の精彩を加へた。一同記念撮影に移る時、ゆくりなくも降りかゝつた細い絲のやうな雨は泪をそゞくとも思はれた。町長さんの先導で清楚な松林を逍遙して砂丘に出で、しばし風光の嘆美に耽つた私は、あの美しい眞砂を手巾に包めるだけ包み、點々として發生した一二寸ほどの松を抜いて家づとにとポケットに入れた。是非もう一度ゆつくり訪れたいと願ひながら、伊作町教育會主催の宴席松葉亭に吉田先生を中心に賑やかな晝餐の饗應にあづかり、更に伊作町に引返して伊作高女の講堂で先生の講演を拜聴した。校長笠井直次氏や學校職員諸氏の心から

なる歡待に、恵まれた一日を沁々有難く感謝した。然しひつきりなしに急がしいプログラムに追立てられる吉田先生には寧ろ健康を氣遣はれる程である。城址の千本楠の偉觀や伊作小學校に保存される島津日新公の遺された教育資料としての『日新柱』見學など殆どお茶の時間さへなかつたが又とない機會として考へるとこれは案内者としての奥田さんの純情として吉田先生も快く受取られたことであらう。四時二十四分の汽車の窓は盡きぬ名残の影を次々に残しながら車中で其日の句作を聞くことができた。

けふこそは血を吐いて啼けほとゝぎす
時雨るゝや悲しき塚のぬるゝほど
これは除幕式が終へた時丁度しぐれが來て寫眞の撮影の時はもうやんでゐた泪のやうな雨であつた。また、かつて侶にありし池畔にてといふ前書で

亡き人のおもかげうつせくさあやめ
また、除幕式の折杜鵑のなきければ
亡き妻の悲しき碑なりほとゝぎす

いづれも除幕式の日切々の情懷と共に生れた句である。

此月の一日亡き夫人の命日にゆかりて追弔の位牌一基を建立し、けふ六月二十日法然上人續仰會鹿兒島支部主催の明枝女史追弔會に奉資すべく準備した。南華頂社から不斷光院に遷し香華燈明供物等のこりなく佛前を莊嚴し、一時半會員着席を終るや、不斷光院住職中原麟宏師以下衆僧に依つて法要けいとしめやかに進められ、念佛聲裡に吉田絃二郎氏、續仰會員代表、友人代表（奥田圖書館長夫人）の焼香を終り、滞りなく追弔の式は終つた。續仰會支部代表の挨拶あつて直ちに講演に移つたが、先生の謙讓な風格はその諄々たる詞藻に盛られた宗教的な經驗體識は法然上人の念佛を最高峯とする所以を強調せられ前後一時間に亘つて會衆はその該博な引例と清冽な言葉に身も魂も洗はれたやうに感じるのであつた。主催側の謝辭に加へて、句碑除幕の日によまれた先生の句一つを披露し所感も交へて挨拶を終り一同『月影』を齊唱し

て會を閉ぢ、會員一同は隨意に順次焼香禮拜を遂げ三時半に終つた。明枝女史の御位牌は先生の行履を記念する好個のものとして残されてゆくであらう。

『清光院芳譽明枝大姉』の裏に

吉田絃二郎氏亡夫人明枝子昭和十二年七月一日寂也吹上旬碑竣成昭和十三年六月十九



日除幕式アリ翌二十日此陣ヲ安シテ不斷光院ニ法會ヲ修シ吉田氏親シク拈香ヲ遂ゲラル法然上人鑽仰會鹿兒島支部小橋麟瑞慶ミテ建修シ謹識スル所也

先生は書院で少憩の後『歩きませう』と言われるまゝに旅館まで御同道申上げたのであるが、その間でさへ何度も何度も感謝してよろこばれる先生であつた。部屋の縁側で私は一時間あまりセツトを挟んで對談さして頂いた。相馬御風氏の書簡を先生の書簡と共に表装せられた書簡集の箱書をせられるのも拜見したりしてゐた。

其夜七時半から縣立圖書館のホールで『文學と宗教』と題する講演會は聴衆一千名室外に溢れるの盛況を呈し一同異常の感銘を受けた。先生の私に示された紙片に次のやうな純情詩人に捧げる優しい贈り物に添へた手紙があつた。(寫眞は除幕式の後の記念撮影、後が句碑)

突然の無しつけお許し下さいませ
「少女の友」で先生がこちらにお出でになると云ふ記事を拜見致しまして私達は幾日も前からお待ち申し上げて居りました先生

の御作を毎月愛讀さしていたゞいてをります私達にとりまして先生をお迎へ出來ました事を心から感謝致してをります此のお花は私達二人が「先生のお淋しいお心をおなぐさめする爲にお花を差し上げては」と相談致しまして持つて参りましたものでございますきれいな花ではございませんけど私達が眞心こめて差し上げましたお花をお受け取り下さいましたらほんとに幸ひに存じます(原文のまゝ)

縣立一高女 四年生

踊 フヂ尾

岩元 トニ子

この二人の少女は別に先生にお會ひしたいと申入れもしなかつた乙女心の眞心籠めたものであつた。そして二つの花束はそのまゝ汽車の旅情を慰められることになつた。

名残を惜しまるゝ發車を控へて驛頭には百餘名の見送りの人達が取巻いたが、一人々々に叮嚀に訣別せられるかに見える。汽車は薩摩路の詩人を乗せて、煙をあとに人各々の様様な感情や涙をさり氣なく二つに離して行つた。(昭和二三、六、二三稿了)

支那時文釋義

道 西 澤 寬

一 零 訊

零訊とは、零細なる消息の意である。こゝには新聞から抜粋した電訊、瑣聞を集めた

(一)財政委員會、定星期一開議。

【訓讀】 財政委員會は、星期一に開議することを定む。

【通譯】 財政委員會は、月曜日に會議を開くことに定めた。

【摘解】 ○星期一 月曜日。日曜日を星期日、又は禮拜日と云ひ、月曜日を星期一、又は禮拜一と云ひ、火曜日を星期二又は禮拜二と云ひ、以下之に準じて土曜日を星期六、又は禮拜六と云ふ。

(三)北平大學、明日開課。學潮已平。

【訓讀】 北平大學は、明日、課を開く。學潮已に平けり。

【通譯】 北平大學は、明日授業を開始す。學校騒動は既にもはや平穩となつた。

【摘解】 ○學潮 學校騒動。潮とは風潮のことで騒ぎの意味である。従つて工潮といへば勞働騒動のことになる。

(三)司法部址、尙未覓有相當地點。

【訓讀】 司法部址は、尙ほ未だ相當の地點を覓め有せず。

【通譯】 司法部の敷地は、まだ適當の處が見つかからない。

【摘解】 ○司法部 日本の司法省に當る。○址 場所又は敷地。あとの意ではない。

(四)馮玉祥調撥部隊、沿黃河攻魯。

【訓讀】 馮玉祥の調撥部隊は、黃河に沿ひて魯を攻む。

【通譯】 馮玉祥の調撥部隊は、黃河に沿つて山東省を攻めた。

【摘解】 ○魯 山東省の異名。又齊とも云ふ。十八省の異名は次の如くである。

山東(魯・齊)、河北(燕)、山西(晉)、陝西(秦)、甘肅(隴)、江蘇(吳)、浙江(越)、安徽(皖)、河南(豫)、四川(川・蜀)、福建

(閩)、廣東(粵)、廣西(桂)、雲南(滇)、貴州(黔)、河西(贛)、湖北(鄂)、湖南(湘)。

(五)外訊、吳佩孚、巧日自南陽、循旱路入川。

【訓讀】 外訊、吳佩孚は、巧日、南陽より旱路に循ひて川に入れり。

【通譯】 外電に據れば、吳佩孚は、十八日南陽より陸路に由つて四川省に入つた。

【摘解】 ○外訊 訊とは通信、消息の意。○旱路 陸路。○巧日 十八日。一個月三十日の異名は詩の韻目に依つて表される、即ち次の如くである。

▲上平 一東・二冬・三江・四支・五微・六魚・七虞・八齊・九佳・十灰・十一真・十二文・十三元・十四寒・十五刪 ▲下平

一先・二蕭・三肴・四豪・五歌・六麻・

七陽・八庚・九青・十蒸・十一尤・十二侵・十三覃・十四鹽・十五咸 ▲上聲 一董・二腫・三講・四紙・五尾・六語・七麌・八齊・九蟹・十賄・十一軫・十二吻・十三阮・十四旱・十五潛・十六銑・十七篠・十八巧・十九皓・二十哿・二十一馬・二十二養・二十三梗・二十四迥・二十五有・二十六寢・二十七感・二十八琰(儉)、二十九賺 ▲去聲 一送・二宋・三絳・四寘・五未・六御・七遇・八霽・九泰・十卦・十一隊・十二震・十三問・十四願・十五翰・十六諫・十七霰・十八嘯・十九效・二十號・二十一箇・二十二禡・二十三漾・二十四敬・二十五徑・二十六宥・二十七沁・二十八勘・二十九豔・三十陷、▲入聲 一屋・二沃・三覺・四質・五物・六月・七曷・八黠・九屑・十藥・十一陌・十二錫・十三職・十四緝・十五合・十六葉・十七洽

即ち東・光・董・送・屋は、何れも一日の異名であり、刪・咸・潛・翰・合は、何も十五日の異名である。三十一日は、韻目な

き爲めに、世若しくは引の字を以て表はす世の字はその形が卅一の二字を合した如くであるのに本づき、引の字はその形31に似てゐるからである。

(六)昨日交通部務會議、議決鐵路乘車免票一律廢除。

【訓讀】 昨日、交通部務會議は、鐵路乘車免票の一律廢除を議決せり。

【通譯】 昨日、交通部務會議では、鐵道無賃乘車券を一樣に廢止することを議決した。

【摘解】 ○昨日 きのふ。日昨とも云ふ。一昨日のことは、前日又は日前といふ。○

交通部 交通部の略、日本の鐵道省に當る。○鐵路 鐵道。○乘車免票 無賃乘車券。

(七)此間行駛内河各埠之小輪、因江湖大漲、刻已一律停止開班。

【訓讀】 此の間に行駛せる内河各埠の小輪は、江湖の大漲に因りて、刻、已に一律に開班を停止せり。

【通譯】 此の處を行駛してゐる内河の各開

港場の小汽船は、江湖の大いに漲つて來た爲に、現在では、已に一樣に出帆を停止した。

【摘解】 ○此間 間は處、場所の意。○内河 河海に對して内地を流るゝ河川を云ふ。○埠 開港場。○小輪 小汽船。汽船

は火輪、汽車は火車と云ひ、汽車と云へば自動車のことになる。○刻 現在、只今。

○開班 開とは車・舟などの出發すること。班とは定期航路の船を云ふ。

(八)淮河水勢日漸低落、往來蚌埠懷遠正陽之長短班輪船、已恢復開駛。

【訓讀】 淮河の水勢は、日に漸く低落し、蚌埠・懷遠・正陽を往來する長短班の輪船は、已に開駛を恢復せり。

【通譯】 淮河の水勢は、日々に漸次低落して減水した爲めに、蚌埠・懷遠・正陽を往復してゐる長距離・短距離の定期航路の汽船は、既にもはや出帆を恢復した。

【摘解】 ○蚌埠・懷遠・正陽 並びに安徽省に在る。○開駛 出帆。(續く)

金銀仰運動ニユ一ス

吉田先生を迎へて

純情に潤ふ集ひ

鹿兒島支部大會

亡き明枝夫人の詩魂永遠に生きよと、夫人愛惜の土地を尋ねて夫人の句碑建立の旅を続けられてゐる吉田結二郎先生は先きに修善寺に句碑を建てられたが、今再び薩南の景勝吹上濱に「初秋や夢よりあはきものがたり」の

詩情

豊かな句碑を建てられ

て、去る六月十九日除幕式を先生臨場の下に行はれた。既に先生と縁を結んでゐた鹿兒島支部の小橋麟瑞氏は先生の來賓を心から喜び、本會を代表して先生に敬意を表すると共に、色々と除幕式に盡力せられたが、更に六月

二十日には支部會員と共に先生を迎へて町重なる夫人の追悼會を行つた。即ち同日午後一時より鹿兒島市の不歸光院に於て會員約百名參集の下にいと敬虔な追悼の法會を勤修した。吉田先生はいたく感激せられて一場の講演をせられたが、感激の詩情は次から次へと奔流して止まらず、一時間半の長きにわたる宗教味溢る豊饒な講話を熱心に續けられた。會員は純情の詩人が語る貴い言葉を一語も聞きもらすまいと終始緊張し、語る者も聴く者も全く融け合ひ

貴重。な一時間半を度しやかに過した。會は小橋氏の感銘深い挨拶によつて終つたが、誠に珍らしい静かな敬虔な會であつた。(詳細は本文の小橋麟瑞氏執筆「薩南の純情詩人」を参照)

直行寺支部の

聖戰祈願會

北海道小樽市の直行寺支部では去る七月七日、日支事變一週年を迎へて莊嚴な聖戰祈願會を厳修した。即ち五時四十分支部員全部直行寺に參集、先づ戰歿將兵英靈の追悼會を行ひ、續いて出征兵士の武運長久並に國難打開の祈願會を勤め、六時半この意義深い報國法要を終了した。更に法要後一同で座談會を開き、時局の重大性を深く徹底せしむべく、銃後の赤誠堅忍持久の精神増進し物心兩方面總動員態勢の具現、舉國一致時難克服への邁進などを申合せて、支部の結束を益々固め、鑽仰精神を愈々昂揚した。

慰問淨土

寄贈者芳名 (第六回)

貳拾圓也 滿洲國撫順淨土宗教會所内

撫順淨土宗教會所内

三圓也 奈良縣五條町 櫻井寺

一圓也 澁賀教區甲賀組 大岡寺

一圓也 加能越能尾組 寶徳寺

同 同 同 西光寺

同 同 同 同 西光寺

同 同 同 同 同 西光寺

拾圓也 京都教區相樂組 安養寺

七圓也 山口教區 教務所扱

(三圓ツ、) 藤井藤然、二宮秀木、池田卓然、(一圓) 末次明信

一圓也 長崎教區平戸組 蓮乘院

一圓也 青森縣北津輕郡小泊村 葛西正盛

拾圓也 尾張教區 城南組寺院一同

貳圓也 芝區芝公園 廣度院

八月也 南海教區愛媛組 寺院殿

壹圓ツ、 正安寺、淨福寺、法然寺、榮養寺

五十圓づゝ 圓満寺、華嚴寺、不退寺、舊重

寺殿

三四八十八圓也 撫河泉教區教務所殿

一圓也 三河教區豐川組 淨泉庵殿

六拾錢 愛知教區西尾組源照庵 源養院殿

拾圓也 神奈川教區東郡組 信法寺扱

(貳圓ツ、) 鈴木惣司、鈴木タネ、

曾我アヤ、早川ツル、粉山ミエ殿

一圓也 青森東組 義經寺殿

法政大學に始めて

佛教講演會開かる

本會の佐藤氏が出講

法政大學には從來佛教の會合は一度も持たれなかつたが、最近とみに佛教研究の熱が學内に高まり、先づ佛教の話を聞きたいと、本會本部に講師派遣方を依頼して來た。本會では早速佐藤賢順



主事を派遣したが、去る六月十五日午後六時より同學教室に於て華々しくその會合を開いた。會する者五十名、數より言へば多くはないが、皆好學に燃える若い學徒に傑たれ者のみで、佐藤氏の語る「現代思潮と佛教」の熱講に終始耳を傾けた。佐藤氏の講話も亦學徒を首肯せしめる明快なる論

理を以てし、佛教特に淨土教こそ現代思潮の根本となるべき論旨を展開した學生は佐藤氏の熱講に深い感激を覺えたが、講演終了後も佐藤氏を中心とした熱心な質問を試み、眞面目な研究心を燃えた。会場は恐らくこの感激は學内に本會を中心とする佛教研究の會を作らしめるに至るであらうが、餘期せぬ收穫を得た事は、講師を斡旋した本部にとつても大喜びであると共に若い人々の佛教研究の熱が如何に熾烈であるかを識り大いに意を強うした。(寫眞は當日の會場)

圓福寺支部 (奈良)

銃後運動に奔走

奈良縣高市郡新澤村の圓福寺支部(主任平野隆嚴)では婦人支部員を督勵して、陣歿勇士の英靈に對する敬弔、戦傷病將士の慰問、出動將士の遺家族に對する慰安激勵等に活躍すると共に、資源愛護と國民貯蓄への率先參加、佛教による強き信念の下に精神報

國奉公の誠を致す等の熱烈な銃後運動に奔走してゐるが、多大の効果を收めて近隣の感激を受けてゐる。又主任平野隆嚴氏は別に皇祖發祥の土地として有名な高市郡聯合青年團の奉仕隊總務として、報國運動に活躍中である。

- | | | |
|--------|---|--------|
| 二四五十錢也 | 三重縣松坂市 | 大西啓三殿 |
| 五四也 | 横濱市木牧 | 渡邊玉子殿 |
| 一四也 | 在原區上神明町 | 松川義造殿 |
| 貳拾圓也 | 新潟縣區教務所級 | |
| 一四也 | 房州富浦町 | 和田正系殿 |
| 一四也 | 澁賀縣 | 無名女殿 |
| 一四也 | 西宮市森具屋敷 | 吉川米次郎殿 |
| 一四也 | | 某 |
| 二四也 | 三重縣松坂市 | 小泉助三郎殿 |
| 一四也 | 出雲今市本町 | 井上麗香殿 |
| 一四也 | 廣島市南竹谷町 | 羽山無太郎殿 |
| 四四也 | 石見數郡通摩組 | 寺院殿 |
| | (壹圓ヅ、)西會寺、全盛寺(五十錢ヅ、)大濱福樂寺、淨光寺、勝源寺、西德寺、報恩寺 | |
| 六圓五十錢也 | 京都市洛南組 | 法泉寺坦徒 |
| | (壹圓ヅ、)岩崎ハナ、岩崎タツ | |
| | 池田露、小野よね、北村さき、吉田きだ(五十錢)池田をき殿 | |
| 一四也 | 關井市 | 池田松平殿 |
| 一四也 | 熊本教區第三組 | 無量寺殿 |
| 拾圓也 | 靜岡教區 | 清水組寺院殿 |
| | (貳圓五十錢ヅ、)實相寺、江淨寺(壹圓五十錢ヅ、)法岸寺、(壹圓)延命寺(五十錢ヅ、)光臨寺海善寺 | |
| 一四也 | 北海道釧田郡大野村 | 地藏堂殿 |
| 二四五十錢也 | 秋田縣能代港町 | 小助門きん殿 |
| 同 | 同 | 栗谷榮子殿 |
| 一四 | 大連寺臥龍盛 | 水谷一雄殿 |
| 四四也 | 東京府八丈島 | 開善寺殿 |



童話

奥 榮

一

紀州の熊野浦に近い處に那智山と云ふ名高い山があります。この那智山には、四十八龍と云はれる程澤山の龍があつて、その中で一番大きな龍は、日本で一番大きな龍だと云はれてゐます。

昔この山には櫨の木が山一面に茂つて居りました。さうして、櫨の實のなる頃になると、龍の村に住んでゐる人達は、男も女も子供達も、四十八龍のある山々に分け入つて、毎日

毎日、日に何俵と云ふ程山澤の櫨の實を拾つて來ては、それを一年中貯へて置いて、お米の代りに食べてゐました。

この山の頂きに妙法寺と云ふお寺があります。そのお寺の鐘堂に大きな鐘が掛つてゐました。さうして、朝晩、時刻を知らせる刻の鐘の音が、山々に飢して、靜かに龍の村々に鳴響いてゐました。

ある日の事です。いつものやうに山の櫨の

實を拾ひに行つてゐた人々が、急に山崩れにでもあつたやうに、てんでに悲鳴をあげながら、われいちがちに逃げ歸つて來ました。

「眼が一つだ」

「手が一つだ」

「足が一本だ」

逃げ歸つた人々は、まつ青になつて、がたがたと慄へながら、口々に、うはことのやうにそんなことを云ひました。

と、また一方では、

「わつ、うちの太郎が見えない」

「お、うちのお婆さんも見えぬぞ」

氣狂ひのやうになつて嘆き悲しんでゐます。

話の様子では、皆んなが櫨の實を拾つてゐると、山の奥から眼が一つ、手が一本、足が一本の途方もない化物が出て來て、あつと云ふ間に逃げ遅れた子供や老人を、ひつさらつて行つたらしいのです。

それからと云ふものは、暫くの間は、村の中は火の消えたやうになつて、だれ一人とし

て山へ登つて行く人はありません。よるときはるとこの化物の話ばかりしてゐたが、この化物は一本足で、とんとんとたいら踏むやうに飛んで来るものですから、誰が云ふとなく一踏鞠と云ふ名前が出来ました。

處でお米の出来ないこの村では今の中に極の飢ゑ死をしなければなりません。そこで、村の人達はいろ／＼相談をした擧句、てんでに弓矢や竹槍や、山刀などを持出して、一踏鞠が出て來たら、皆んなで一時に打殺してやることに手はずをきめて、山へ行きました。すると思つた通り一踏鞠がとんとんと一本足でたゞらを踏みながら、山の奥から飛んで來ました。

「來たぞ」
「そうら來た」

人々は口々にさう喚き立てながら、弓を持つたものは弓に矢をつがへ、竹槍を持つたも



のは槍の穂先を並べ、山刀を持つたものは、山刀をぎりりと抜いて、ひとつたゝらの方へ

槍を持つた大勢の人に一時にかゝられてはかなひません。雨のやうに飛んで来る矢に驚いてまごまごしてゐると、そのあとから竹槍や山刀を持つた一隊が押寄せて來ます。流石の化物も、これはかなひないと思つたのでせう、そのまゝ大急ぎで山奥へ逃げ込んでしまひました。村の人達は急に元氣になつて、それから毎日弓矢だの竹槍だのを用意して、山へ登つて、極の實を拾つてゐました。

と、それから五六日たつた或日のことです。暫く姿を見せなかつたひとつたゝらの足音が、とんとんと山奥から聞えて來ました。

「來たぞ」

「今度こそ退治てやるぞ」

村人達は弓に矢をつがへ、竹槍を構へて、ひとつたゝらの現はれるのを待つ

比羅夫てゐました。すると、これはまた何と

した事でせう。ひとつたゝらは、何時の間に

か山の頂にあるお寺の釣鐘堂に釣してゐた

進んで行きました。

ひとつたゝらがいくらか強くとも、弓矢や竹

大釣鐘を盗み出したと見えて、長さが一米半許りもあるその大釣鐘を、頭の上からすっぽりと冠つて、一本足でたゝらを踏みながら人々の方へ近づいて来るのです。

餘りのことに吃驚仰天して、村人達があわてゝ放つた矢は、その大釣鐘にあたつて、かゝんと弾き返つて来るばかりです。

これでは竹槍や、山刀で突いて、切つても、

斬れやう道理がありません。あつと思ふ間にこの釣鐘の化物は、うろたへ騒ぐ村人に近づいて、逃げおくれた人達を、にゆつと釣鐘の中から松の木やうな一本の手を突き出してひつ捉へ、次々に投げつけたり踏み殺したりしました。

生き残つた人達は、弓矢も竹槍も投げ捨てて命からがら逃げ歸つて來ました。

もうかうなつては、だれ一人として山へ登つて行く人はありません。と云つて櫛の實を拾つて置かないと、皆んなが飢ゑ死しなければなりません。そこで、村人達はまたいろいろと相談をしたあげく、山向ふの村に住んで

ある狩場刑部左衛門と云ふ大層強いお侍の處へ、ひとつたゝらを退治貰ふやうに頼みに行きました。

刑部左衛門は先祖代々那智の裏山に當る櫛原村の郷士で、弓矢を持たせると、空を飛ぶ鳥でも、崖を走る獸でも、百發百中と云ふ弓矢の名人でした。刑部左衛門は、村人達の話を知ると、暫く考へてゐたが、

「よし、それでは、三日ほど待つて下さい。

そのうちに私がきつとその化物を退治上げます」

と、答へました。

刑部左衛門は、さう云つて村人達をかへしたものの、大釣鐘を冠つてゐるひとつたゝらの事を考へると、どうして退治していゝものかと、流石の弓矢の名人も、途方にくれました。

が、約束の三日目が來ると、刑部左衛門は、何か心に定める事があつたと見えて、弓矢を携へてたゞ一人、ひとつたゝらのある那智の山へ出掛けて行きました。

何時もならば櫛の實を拾ひに來た村人や、

お寺にお参りする人達が澤山ある筈ですが、此頃ではあたりに人の子一人居りません。刑部左衛門は山の中腹まで來ると、大きな松の木の根もとに腰を下して、ひとつたゝらの出て來るのを待つてゐました。

すると何時の間にか、人の臭ひを嗅ぎつけたと見えて、まるで地響きでもするやうな、とんとんといふひとつたゝらの足音が、山の上の方から聞えて來ました。

刑部左衛門は、はつとして立ち上ると、背中に背負つてゐた簾から矢を引抜いて、弓につがへながら、足音のする上の方を見上げました。と

兩側に大木の生え茂つた峻しい坂道を、頭からすつぽりと大釣鐘を冠つたひとつたゝらが、まるで踊りでも踊るやうな恰好で、とんとんと、大急ぎで駆け下りて來るのでした。

「ようし」

刑部左衛門は、弓の弦をきり／＼と引絞つて狙ひを定め、兵と矢を切つて放ちました。

風を切つて飛んで行つた矢は、ひとつたゝらの冠つてゐる大釣鐘に當りましたが、かあんと、鋭い響を四邊にたてただけで、そのまゝ弾きかへりました。

續いて、第二、第三、第四と、刑部左衛門は、眼にもとまらぬやうな早掇で、次々に矢を射かけましたが、どれもこれも、大釣鐘に當つて弾きかへるばかりです。

そのうちにも、ひとつたゝらは、とんとんとと、一步一步刑部左衛門の方へ近づいて來ます。さうして、今までは、路の傍に生え茂つてゐた灌木や、雜草でよく見えなかつたひとつたゝらの松の木やうな大きな一本足が、飛び上る度びに大釣鐘の下からにゅつと見えるのでした。

「おのれつ」

刑部左衛門は、此度は、この足許を狙つて、一本、二本、三本と、矢繼早に殘りの矢を射かけました。

併し、飛んで行つた矢は、矢張り、前と同じやうに、かあんと、かあんと、釣鐘に弾き返

身を伏せて、その一本足を大釣鐘の中に匿してしまふからです。

見る見るうちに、ひとつたゝらは、だん／＼刑部左衛門に近づいて、すぐの前の十米ばかりの處までやつて來ました。

「えゝ、残念ぢや、もう矢がなくなつた」

刑部左衛門は、背中に差してゐた最後の矢を射つくしてしまふと、さも口惜しさうに、大きな聲でさう云ひました。

と、ひとつたゝらは、その聲を聞いたと見えて、今迄冠つてゐた大釣鐘をすつぽりと、脱いで、側の草むらに投げ捨てました。

まあ、何と云ふ恐しい姿でせう。頭

の毛はおどろにふり亂れて、人とも区別とも分らない眞黒い顔の眞中に、大きな一つ目が、爛々と輝いてゐます。さうして、耳までも裂けてゐるかと思はれる程、



比羅夫

かつと開いた眞赤な口の中には、鋭い鋸の歯のやうな歯が並んでゐるのでした。

「はつ、はつ、はつ……」

ひとつたゝらは、もう大丈夫と思つたので

時世は移る

大羽比羅夫

妹「お姉ちゃん、どうしてこんないゝ人形とそんな悪い人形と取替へるの」
姉「お前木箱は何よりも大事なんだよ」



せう。今、一飛びで、刑部左衛門に飛びかゝらうとするやうに身構へをしながら、喉を鳴らして笑ひました。

流石の刑部左衛門も、身の毛がよだつやうな思ひがして、思はずぶる／＼と身を慄はせました。

が、ひとつたゝらが、ばつと大地を蹴つて飛びかゝらうとしたその途端、刑部左衛門は、袖の下に匿してゐた一本の矢を、弓につがへると、そのまゝびゅつと、ひとつたゝらの一つ目を目がけて、射放ちました。

「ぎやあ」

ひとつたゝらは、その瞬間に、森中に響くやうな大きな呻聲をあげました。と、見ると一つ目に突立つた矢の根からは、見る見る中に、噴水のやうに眞赤な血が吹き出して、ひとつたゝらは、丁度大木が風にゆれるやうに、一本足で立つたまゝ、ゆらく揺れてゐたが、やがて、ばつたりと、路の中程に、長くなつて倒れてしまひました。

刑部左衛門は、一番最後の矢を一本だけ、

山へ登る前から、萬一の用意に、袖の下へ匿して置いたのでした。さうして、慥と、矢を皆んな射盡したやうな振りをして、ひとつたゝらが、大釣鐘を脱ぐのを待構へてゐたのでした。

刑部左衛門は、こんな風にして、とう／＼村人に約束した通りひとつたゝらを退治しまひました。それからと云ふものは、もう二度と、この一目の化物は那智の山には現れませんでした。村人たちは、大層悦んで、ひとつたゝらの持出した大釣鐘を、村中總出で山の頂にあるお寺の鐘堂へ搬き上げました。さうして、その日から、また、朝晩の時刻を知らせる刻の鐘が、靜かに、平和な麓の村々に鳴響いて、慥の實熟する頃になると、老人も子供も、男も女、皆んな、四十八龍のある山々に別け入つて、慥の實を澤山拾ふことが出来るやうになつたと云ふことであります。

大羽比羅夫畫

信 仰 相 談

… 中村辨康師擔當 …

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

永遠の生命を得るには

(問)

お念佛を稱へても、み光の中と云ふ感謝の氣も、本當に本願にたよる心も、まかせる心も私の心の底から湧いて來ません。考へて見れば明日のことどころか一寸先も聞の私です。何うか素直な心で稱へたいと思ひますが、單に空念佛となつたり、現在「御佛を思ひながら稱へて居る此念佛で果して助けられるか」と迷つてばかり居ます。だから念佛して見ても自分の稱へる念佛が誠のものでないだけに、却て御佛に背いて居るやうな氣も致します。何うすれば早く永遠の生命を得られるでせうか。

(答)

(蒲田・木村とし子)
御尤の御實ねで眞面目な方である限り何誰もかうした疑問は起るものです。
一體永遠の生命と云ふものは誰でも持つて居るのであります。が、唯だそれが闇の中でか光の中での相違でありまして、生命の永遠なることには變りはありません。死んだら虚無になると思つて居る人も世の中にはかなり多いやうですが、ドツコイさうは問屋がおろして呉れませんか。私達の一生涯の間に働かした心と其心から爲した行為とは皆な借金であります。

その中でも、一番多く働いた心と行為との集積は、最も強力な緊急を要する借金でありまして今何とか方法を講じて御破算にして貰ふか自分で清算するかしなくては、死後直ちに借金取りにせめられることになつて居て、到底虚無になる譯には行きません。此肉體が死んだ位のことでは借金が御破算になるやうなら、皆んな仕たい三昧のことをしてよい譯ですが、私達の生命は實は肉體が死んでも業力となつて死なないで居るので借金に對しては済しくづしにするか又は一返にか返済しなければなりません。若しさうでなく死んだら帳消しになるやうなら、生れて來ない前も平等の状態であつたのですから、現在も皆な平等の状態でなくてはなりませんのに、身體の弱い人があり強い人があり、お金持が

あり貧棒人があり、子供のある人があり無い人があり、子供があつてもよい子の人もあり悪い子ばかりの人もあり、實に千差萬別ですが、それは皆な偶然であるならば運賦天賦と云ふことになるので、誠に出鱈目な人生としか云へなくなります。然るに人間以外は實に整然として秩序がたもたれて居るのですから、人間の運命のみは出たとこ勝負で無茶苦茶だと云ふことには行きません。それでは天地の理が立ちません。そんな馬鹿なことはない筈です。私達が現にかうして色々な境遇を受けて居るのは、自分にはよく判らないけれども、前の借金を清算させられつゝ居るのですが、盲滅法の暗闇の中に居るものですから、藻掻きに藻掻いて借金の上塗ばかりして居るのです。だから益々闇の中をうろつ

信 仰 相 談

かねばならぬ原因を作つて居るのであつて見れば、死んだからと云つて決して御破算になつてしまふ譯には行きません。そこで佛教の中でも、小乗教の人達は何うかして死んだら御破算になるやうにと一生懸命に修行したのです。即ち「灰身滅智」と云つて修行に依つて死後を虚無の状態にしてしまひたいと努めたのです。然しそれで果して其念願が完成したでせうか。それも謂ゆる羅漢果を得た人だけたつたでせう。イヤそれさへ不明なことです。つまり空觀に入つた丈のことですか、云はゞ火山が一時休止して居ると云ふ状態に過ぎないのです。だから大乘教では「佛」と云ふ永遠に目醒め行く覺醒者たらんことを念願するやうになつたのです。つまり返濟しやうとしたのです。

こんな譯で何れにせよ私達には永遠の生命を持つて居りそれから抜け出ることは出来ないのであります。それが何時も悪い状態で持續されて居るのですから、此儘では永久に浮ぶ瀬がない譯です。だから之を浮ばせなくてはなりません。それで六波羅密と云ふやうな修行をして佛になるか、又は天地一切を綜合する大生命の中に融け込んで行かうとする信仰に依るかの外に手はないのであります。前者は我々切々として働いて漸くに借金済しとするのであり、後者は親子の關係を結んで一度に御破算にして頂くのであります。つまり此儘では暗い中で永遠に生きて苦しんで居なければならぬのを、その何方かの方法に依て明るく楽しく元氣よく生き抜いて行かうとするのであります。

私達が念佛するのは後者の場合であります。今まで一方ならぬ放蕩見であつたのですから、その習慣情性があつて中々親孝行の氣持になれないので「感謝の氣持」も起らず、心がひねくれて居るから「委せ切る心」にもなれず、云はゞ里子に出されたものが親元に引き取られても、里親の方が戀しく、何となく生の親が他人のやうに思はれるのと同じやうな氣持なのでせう。之は昔からさう云はれて居ります。

次に「此念佛で果して助けられるか何うか」の迷ひも、前述の通り他人行儀が抜け切れて居ないからです。こちらの念佛で助かるのではありません。こちらにはたゞお母様の名を呼んで居るだけなのです。お母様の名を呼んで居るところ即ちもう既に助けられて居るのではありませんか。だから自分の稱へる念佛が誠のものであるかないかを氣にするよりも、既に稱へる氣になつて稱へて居ること其事を御喜びになつたらよいでせう。私達はまだ赤ん坊で目が見えませんが既に如來様の懷に抱かれて居るのですけれども、悲しい哉、それが判らないので、唯だ呼んで居るだけなのです。お母様の方では「オ、よしよし」とあやして下さつて居るのですが、こちらの耳がまだ聞えないものですから、お母様の方がまだ聞いて居て下さらないのか知らと思つて不安を感じて居るだけなのです。また私達は念佛に依て如來様のお乳を呑んで居るのですが、まだ意識が發達して居ませんから、飲んで居るときへ知らないで居るのです。此事に氣付いたら今にその意識がハツキリして來ます

編輯後記

◆先般の大雨には、全国各地の被害も甚大な上に、死傷者も数多く御氣毒な方も澤山に見受けられお慰めの言葉もない有様ですが、愛読者各位には御變りも御座いませんでしたらうか。僭越乍ら誌上より謹んで御見舞申上ります。

◆當方も愛読者各位より色々とお見舞を頂きましたが、幸ひ何事も御座いませんでした故御安心下さるやう。一同いよく元氣にて目的に邁進いたしてをります。

◆これからは暑さも一段と厳しくなることでせうが、それにつけても内地では想像もつかぬ炎熱下にあつて聖戦に死闘を續けられる皇軍將士の上に思ひをはせずにはをられませぬ。巻頭岸本綾夫閣下の談話に述べられた聖戦の意義を充分に體得して、酷暑を克服

することも就後奉公の重大な使命でありませう。

◆「喇嘛教徒と日本」の筆者小林義道師は知恩院庶務部長の要職にあられ、過日滿洲、北支を視察せられて、蒙古青年數十名を内地に於いて教育するために引率歸朝せられ、目下知恩院境内宿舎に於いて、その教育、修養のために盡力せられてをります。

◆長らく御愛讀を願つた飯田光明氏の「血しぶきの法將」は都合により本誌を以つて中篇完結とし、期を改めて終篇を連載することになりました。作者も終篇に於いては更に力作を發表すべく準備を進めてをります。御期待を願ひます。

◆今月は「讀者の聲」を割愛いたしました。が、來月號よりはずつと擴大いたしますからどしどし御寄稿願ひます。但し二十字詰、十行以内、端書でも結構です。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話銀座代表 五七六六

◆本誌掲載の廣告は一切右の店で取扱つてをりますから、廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様願ひします。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で御願ひします

淨土 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十三年七月二十日印刷納本
昭和十三年八月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ケ年 金一圓

(送料不要)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年七月廿日印刷納本 昭和十三年八月一日發行

淨 土 第四卷 第八號

定價 金十錢
（送料）
滿鮮臺灣等 金十一錢
外地定價